

42278

教科書文庫

4
810
42-1930
2000301843

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

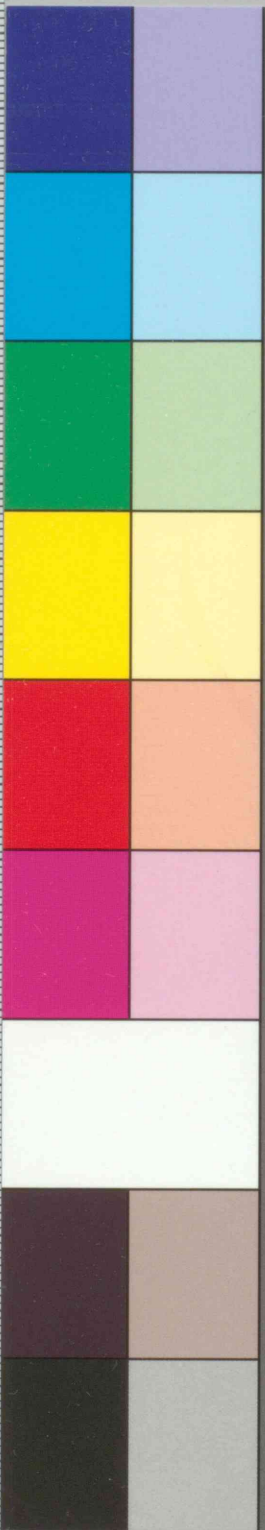
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8  
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

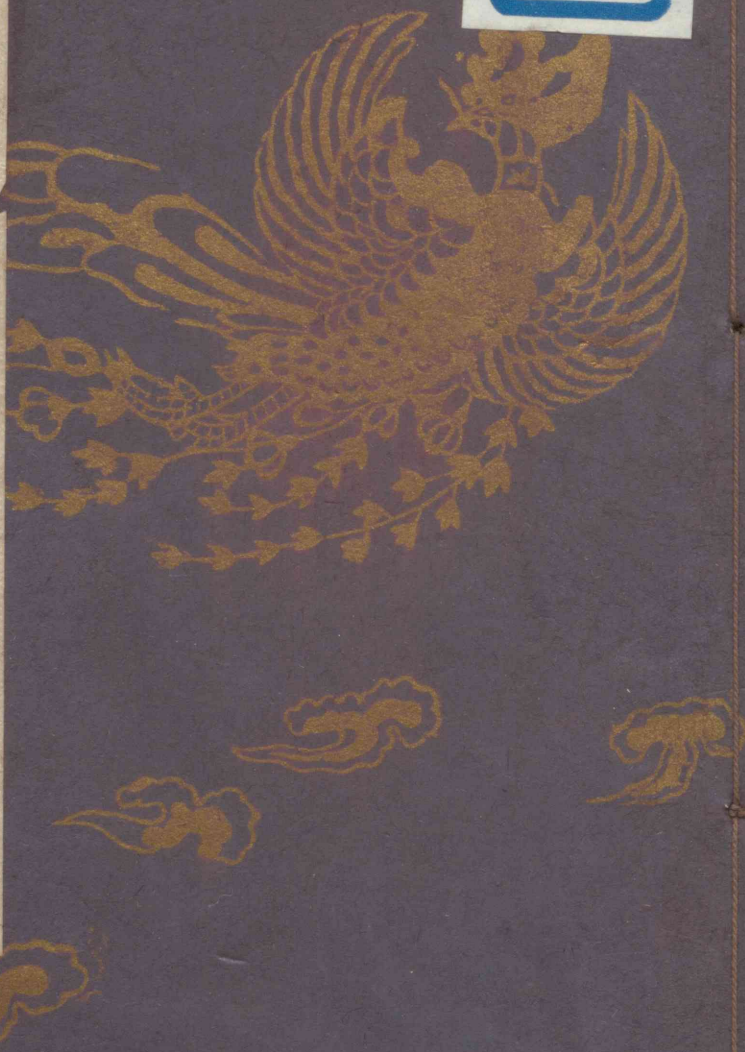
© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



2 1 20 6 8 7 9 5 4 3 2 1 10 6 8 7 9 5 4 3 2 1 0

3759  
H118  
資料室



女子國文大綱 喜四

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5  
JAPAN

昭和五年九月八日  
教育部省定  
高等女子學校國語科用

資料室

375.9  
H48

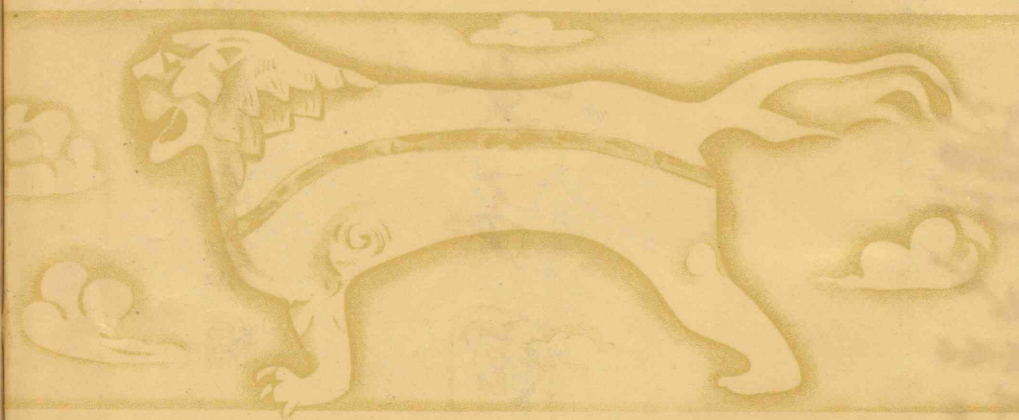
平林治德編

女子國文大綱 卷四

木

立川書店發行

キヤラコ 大巾 三十粒





國體觀念の涵養、國民精神の作興、國語の正しき理解と使用、情操教育等、國語教授の使命は益々重大を加ふる秋に當り、これに重要な關係を有する教科書が一夜作りの無責任なものであつてはならない事を痛感したのが本書編纂の動機であります。

材料に就いては權威ある作家の手になつたもので、純正なる國語の表現であり、之を玩味する事によつて、わが國の特質を悟り、われらの祖先ひいては日本人たるわれ自らの本質を感得するに便なる作品を採り、一方常識を廣め、情操を高め、全人間教養に役立つものを選ぶ事に苦心しました。

排列に就いては作品の本質を吟味して、相似たものを連續し、理會の順序を自然ならしめ、且讀後の印象を深からしめ、而もその間に變化あらしめるやう留意しました。

卷九十に於ては江戸時代以前の作品を倒敍式に排列し、その間に適當の現代文を挿入し、卷末の日本文學年表と相俟つて、文學史の概念を得るに便ならしめました。

採擇の作品に就いては、出来るかぎり原作を尊重しましたが、教授上の用意から多少の改竄をした點は特に原作者の諒恕を仰がねばなりません。頭註に原本の刊行年月發行所等を記したのは、出所を明確に示す一方、自修に便ならしめ、進んで研究を深める興味を起させ度い老婆心からであります。

美術史等の講義の無い中等學校に於て美的情操を養ふのは國語教授の重要な役目と考へますので、挿繪には特に意を用ひ、なるべく古今の名畫彫刻・建築等の寫眞を挿入し、表紙の題箋は藤原行成筆と稱せられる御物倭漢朗詠集から拾字したものであります。

## 女子國文大綱 卷四

### 目次

一	明治神宮	(口語)	溝口白羊	一
二	國歌の話	(口語)	田邊尙雄	一六
三	我が家の富	(文語)	徳富蘆花	三三
四	短歌		落合直木 石川啄木	三三
五	廚子王	(口語)	森鷗外	三三
六	動物園	(口語)	芥川龍之介	三五
七	芋掘	(口語)	長塚節	三六

八	茹栗	.....	(口語)	五十嵐	力	六
九	落葉松	.....	(詩)	北原白秋		七
一〇	道風の見た雨蛙	.....	(口語)	薄田泣菫	夫	
一一	武藏野	.....	(口語)	國木田獨步		八
一二	小品三章	.....	(口語)	九條武子		九
一三	本居翁の遺蹟	.....	(口語)	芳賀矢一		一〇
	附古事記傳の版下	.....	(口語)	下村	宏	一一
一四	ことばの變遷	.....	(口語)	佐々政一		一二
一五	言語	.....	(文語)	貝原益軒		一三
一六	形	.....	(口語)	菊池	寛	一四
一七	先生の墓	.....	(口語)	秋田雨雀		一五

一八	雜草	.....	(口語)	相馬御風		一五
一九	猫の子をもらひにやる文	.....	(手紙)	樋口一葉		一六
二〇	詩二篇	.....		室生犀星		一五
二一	宿かり	.....	(口語)	志賀直哉		一六
二二	笑話	.....	(文語)			一六
二三	文章雜話	.....	(口語)	島崎藤村		一七



雪中鶴燕圖 伊藤若冲筆

(六 動物園)

伊藤若冲

初め狩野派を學び、後元明諸大家の風を摸し、又光琳の彩色法をも用ひて、遂に一家をなす。雪中鴛鴦圖はもと京都相國寺にありしが、明治廿二年明治天皇に獻上して御物となれるもの。「花鳥魚貝圖」三十幅中の一にして若冲の代表的傑作なり。彼の奇癖に走らず、其の筆致・傳彩・構圖共眞に穩雅豊麗にして、裝飾畫風の上々なるものなり。而してこの圖は若冲の畫技最も醇熟せし頃の作にかゝる。



## 女子國文大綱 卷四

溝口白羊

名は駒造、大阪の人、明治十四年生、早稻田大學出身、詩人。

代々木の森  
東京市の西郊代々木にある森林。

### 一 明治神宮

溝口 白羊

快美なる色彩の反射と和かい感觸とをもつた秋の陽光に包まれてゐた代々木の森！私はそれを仰ぎながら、そして何處からともなく高くにほつて來る新しい檜の香をかぎながら、幾度そこを通つたことであらう。森の中からは、時として、石を切るらしい金屬的の響や、木を削るらしい輕快な音が、快い調子を作つて流れて出た。

一 明治神宮

或時は、無数の蟻の集團が大きな餌を引くやうに、六七丈もある大きな獻木を牛車に載せて、多数の人夫が汗みどろになりながら、曳々聲して森の中へ引入れるのを見たこともあつた。



あの中に明治神宮が建つのだ、とさう思ふと、私の心は莊嚴な或衝動を感ずると同時に、生みの親の墓に對するやうな強い懐しさが充溢した。そして

明治天皇

て行くのが、たまらない程嬉しく思はれた。

その明治神宮がとうとう竣工を告げた。かつて、赤土の露出して居る上に、鋭く尖つた切石が幾つ



もならんで、烈しい日に光つて居るのを見た處には、今清々しい色の小砂利を敷きつめた参道の白い線が、常緑の森の中を長く續き、その以前、疎らな松林の中から耕地の廣く展開して居るのが見渡された御料地は、いつの間にもやらずつかり見ちがへる程美しい景色になつて、森嚴と幽邃との趣を兼備

昭憲皇太后

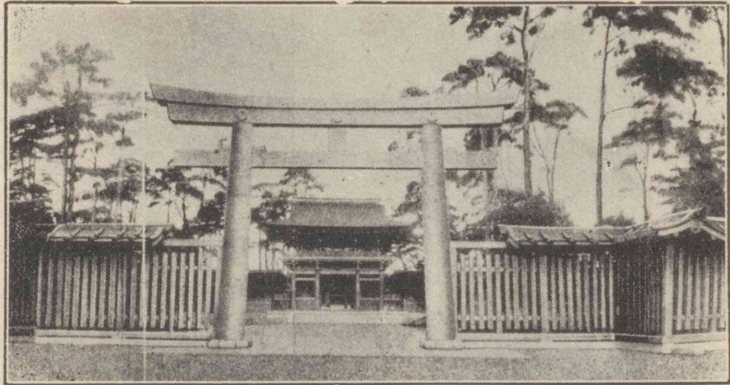
一 明治神宮



へた鬱蒼たる密林の中から、いはゆる流造素木の神殿の見

えつ隠れつしてゐるのが、何ともいへない神々しい感じを起させる。

神域！眞に神のいまし給ふに適した莊嚴と靜寂と幽雅との領土！私はじめてこの完成した明治神宮の神苑に立つたとき、今更のやうにその改つた光景を見て、強烈な感激に打たれた。何者の力がこの新しい「建設」の事業を完成させたのであらう。造營局



の記録の上には、大正四年四月起工以來、直接造營の事に當

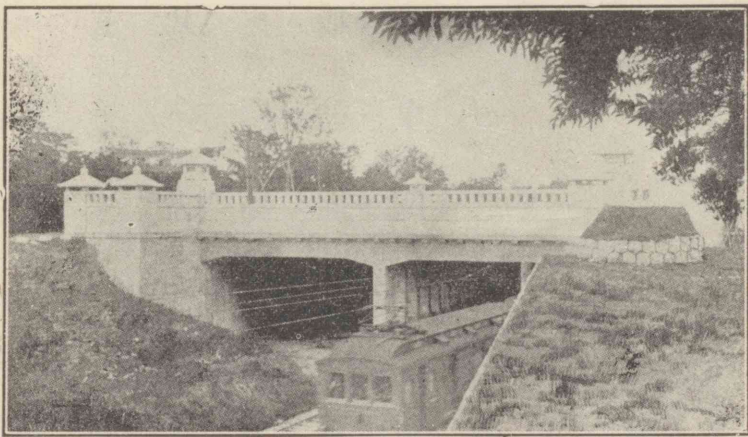
明治神宮

つた延人員が百數十萬人であるとか、用材の總計が尺一萬九千本であるとかいふやうな事が、細密な數字的計算に基づいて書いてあるが、さういふ數字を高く超越して、隠れた部面に働いた強い力こそ、實にこの明治神宮の基礎を千載不動の固さに築きあげたものであつて、山よりも高い明治天皇の御聖徳と、海よりも深い昭憲皇太后の御仁慈と、そしてこの二柱の大神の御恵に對へ奉る國民の至純なる心情と、この三つのものが、陰に陽に工程を抄らせて、遂にこの記念すべき大工事を完成するに至らしめた原動力である。ことは、何人も疑ふことの出来ない明瞭な事實である。11月10日

嗚呼、純粹な至誠の動機から出た青年團の造營奉仕、百里

二百里の遠方から眞心をこめて輸送して來た無數の獻木、

それらは何事を語つて居るか。實にこの神宮の御苑を形成する一本の樹木、神殿を組織する一本の柱にも、悉く國民の燃えるやうな熱誠がこもつてゐるのである。かくして殆ど全く國民の誠意を以て完成したその宮居に、國民崇敬の標的たる明治天皇、昭憲皇太后の神靈が宿らせ給ふのである。何といふ美しい、尊い事實であらう。



神宮橋

今までの神社に曾て見たことの無い明治神宮の特色は實にこゝに在るのである。私は表參道を一直線に進んで、神宮橋畔第一鳥居の前に來て、遠く神域の中を望み見た刹那に、第一にこの事を直感した。そして一步步々、美しい小砂利の上を、神殿に近く踏入るに随つて、愈、肅然たる心持になつて、深く襟を搔合はせた。

參道の兩側には盡きること知らない密林がどこまでも長く續いて、行くに随つて段々濃くなつてゐる。

鳥居から約一町ばかり奥へ入つて神橋の處へ來ると、何處からともなく清冽な水の落ちる音が聞えて來る。岡山縣萬成産の石で出來てゐるといふ勾欄に凭つて下を見る

萬成  
岡山市の附近、  
花崗石の名産  
地。

と、橋下は溪流の趣を摸した風致の好い細流で、筑波山の國

有林から移した自然石の配置され  
た處に、數十株の楓が、今しも紅於の  
影を水面に落して、美しい秋の錦を  
織つてゐる。此處は神苑の中で唯  
一の人工を加へた處で、神苑の殆ど  
總べてが繊細な技巧を排した自然  
的の大觀を呈してゐる中に、特殊の  
庭園趣味を發揮してゐるのである。  
神橋を渡ると兩側は一帯の杉並  
木になつてゐて、その左側の並木が斷えた處に、樹齡千七百



紅於  
霜葉紅於二月  
花。杜牧、山行  
詩

本殿及中門

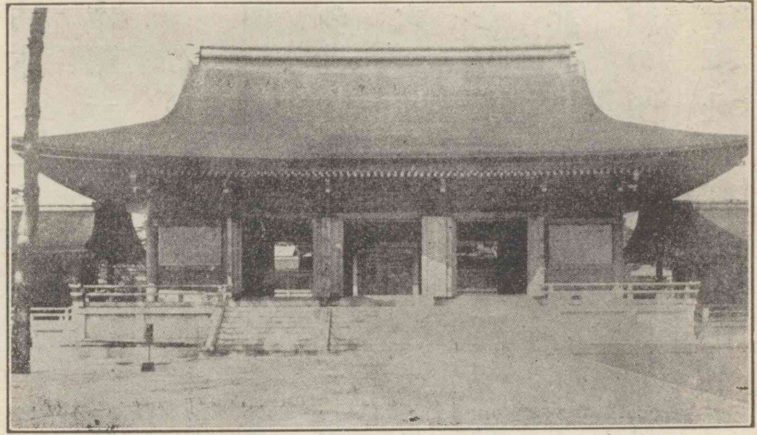
四十年を重ねてゐたといはれる直立六丈餘の臺灣産檜の  
古木で造られた大鳥居がある。明神鳥居としては實に日  
本第一のもので、高さは三丈九尺に達して居ると聞いた。

この鳥居の在る處は、南方原宿方面からする幅員八間の  
南參道と、北方千駄ヶ谷から來て居る幅員六間の北參道と  
の接合點で、此處から左折すれば、道は更に十間の幅員に擴  
大されて西を指すこと百五十間。その道の盡きた處で、右  
を見ると、はつと眼界は急に廣く且明るくなつて、約一町の  
北方に、亭々として高く聳えた松の疎林を背景にした、土佐  
繪のやうな神殿の檜皮葺を拜することが出来る。

御社殿は樓門・拜殿・本殿等の建造物を合はせて、その總坪

原宿  
東京府豊多摩郡  
千駄ヶ谷町大字  
千駄ヶ谷  
千駄ヶ谷  
千駄ヶ谷

拜殿



何事のおはしますかは知らねども

數六百五十坪。本殿は全部木曾御料林産の檜材を以て造つたもので、近く拜殿にのぼつて拜すると、芳しい檜の香氣が強く鼻を撲つて、如何にも神の新しい宮居らしい一種の崇高な感じに打たれる。拜殿から中門を通して奥は、即ち神靈のおはします内々院で、衆庶の漫りに窺ふことを許されない神聖の場所である。

かたじけなさに涙こぼるゝ

私は黙禱を終へて始めて向ふを見上げた。

まあ、何といふ明るい、快い感じを持つた社殿だらう。今まで見た大抵の社殿が、皆暗い周圍から來る鈍い光波の中に、静寂な、併し陰鬱な感じを漂はせて居る中に、この神宮ばかりは隠す所の無い心持で、十分な光線に總べてを解放し、總べてを露出して見せてゐる。而も、それでゐて決して膚淺な心持はせず、却つて一層深く大きくされた静寂の中から、譬へやうもない莊嚴な感じが滲透して來て、自然と頭のおさがるやうな強い威力が迫り來るのを覺えるのだ。これでこそ明治天皇の神靈を奉祀した宮だといふ事が

進歩的  
積極的

退歩的  
消極的

進取的  
退歩的

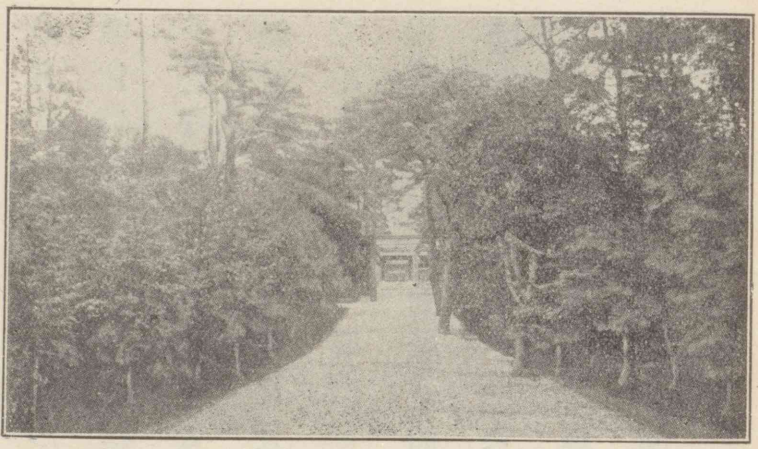
美  
調和  
統一

出來ると私はさう思つた。久しく宮廷に蟠つてゐた一切の舊弊を排除して、國民と近く接觸し、國民と親しく協力して、新文明を吸収しようとして御勉め遊ばされた明治天皇の活動的・進取的の潤達な御氣象に對して、如何にもその明るいお宮の感じが、びつたりと呼吸を合はせてゐるやうで嬉しく思はれる。

拜殿を中心にして左右に均齊を保ちながら、長く兩翼を張つた廻廊に見える幾多の列柱、そしてその奥につづいて便殿の遠く望まれる心持、それらの總べてが、又、たとしへもない莊嚴美を語つてゐる。

拜殿を下りて、西神門から出て行くと、約一町に亘る森林

西參道より  
神門遠望



一 明治神宮

へ行くまでの道には、ずつと長い間、さうした色彩が續いて

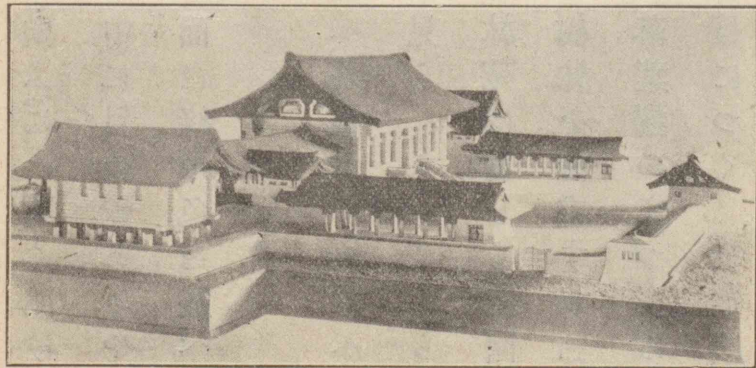
帯があつて、その向ふには、廣く開けた明るい視野の中に、目の覺めるやうな芝生地が一面に緑の色を展べてゐる。

嚴肅から快活へ、莊嚴から優雅への急轉が其處に見られる。こゝらへ來ると周圍の林苑は著しく庭園風を帯びて來て、樹林を組成する色の樹種の中に、落葉樹の交つてゐるのが少からず目につく。寶物殿

寶物殿

ある。寶物殿は形式を中古時代に取つて、その材料と建築の方法とを現代に取つた鉄筋コンクリート石張の建築で、建坪數實に五百十五坪、之に使用した八幡製鐵所製の鐵材は約十二萬貫に及んだといはれてゐる。

後は一帶の密林で、前には優雅な橋梁を架けた池水を控へ、その池塘をめぐつてわかくしい楓の樹が美しく植ゑられてゐるのが、面白い風情である。



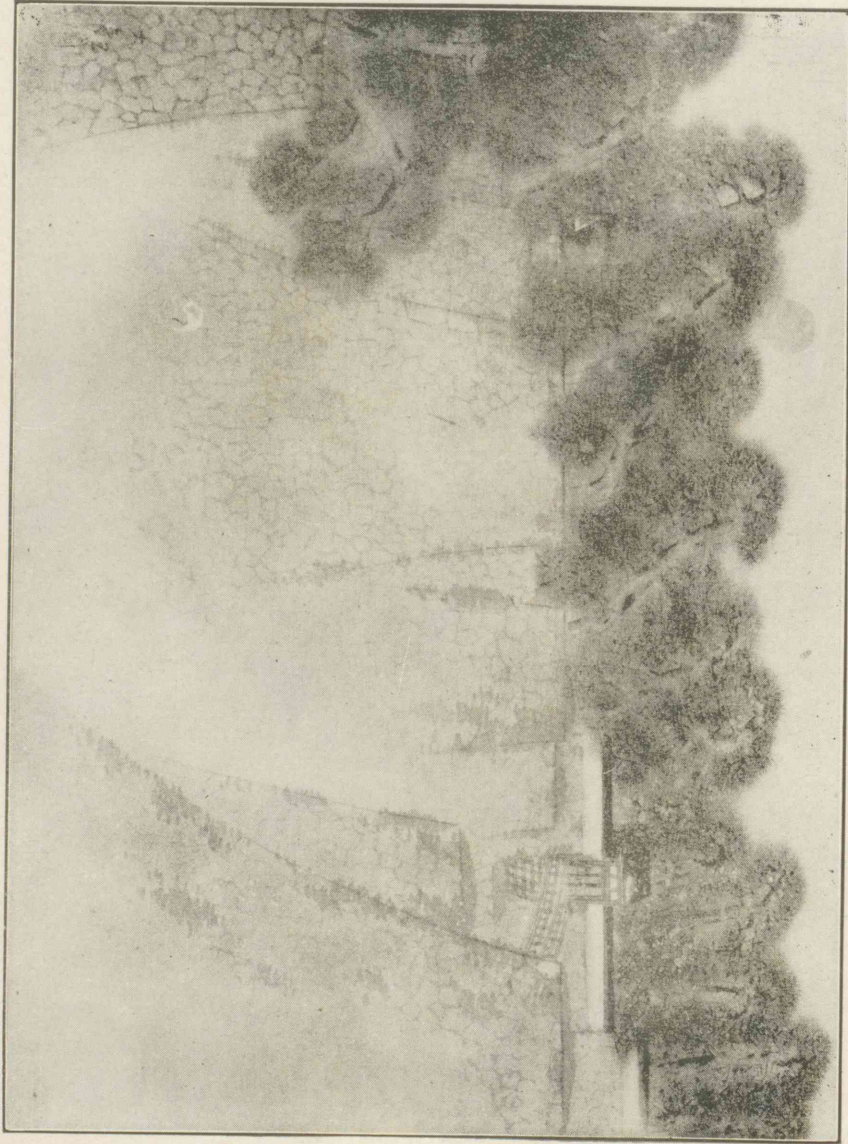
私はこの寶物殿まで來ると、再び元來た道を表參道の柵形に近い社務所の邊まで引返した。このあたり左右兩側にある古雅な木柵を廻らした一構は、即ち明治天皇・昭憲皇太后の深い御由緒を留めてゐる舊御苑で、御苑内の建物は、舊御殿といひ、舊御茶屋といひ、何れも極めて御質素なものばかりであるが、御庭は實に田園の自然の景色そのままの面白いもので、殊更技巧を弄しない所に、何ともいへぬ優雅な趣を帯びてゐる。この御苑は祭神二柱の御在世中殊に御愛賞遊ばされた處で、大空高く聳えてゐる松を背景にした芝生の上に點在して、しをらしく咲いてゐる萩の花の幾株にも、熊笹の一面に生ひ茂つた小丘の上に連なり續いて

るる櫟や楡の雜木林にも、到底東京近郊では見る事の出来ない野趣がある。

昭憲皇太后が屢行啓遊ばされて好んで釣をお垂れに成つたと云ふ池は、練兵場方面から流れ込む泥水の爲に搔濁されて、今はもう往時の清らかな面影を見るよしもないが、池を周つて繁茂した樹林が、物凄い程靜かに澱んでゐる水面に、濃く淡く其の黒ずんだ陰影を落して居る光景は、幽邃と云はうよりも只もう神祕の仙境である。

昭憲皇太后が特に御賞觀あらせられたといふ菖蒲田や大正天皇が東宮時代に行啓あらせられた時に屢御飲用遊ばしたといふ清正井きよまさいの名泉、代々木の村名の起源であると

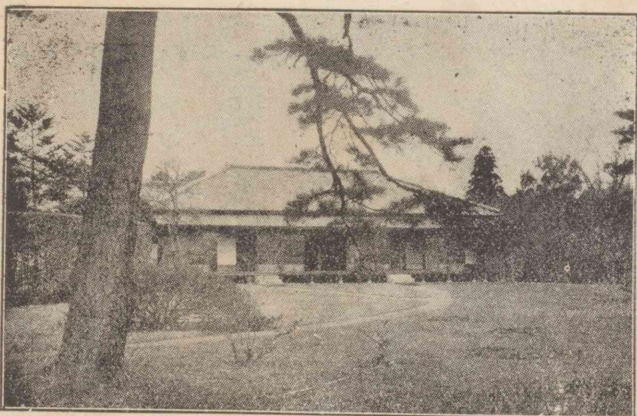
(宮城図 1)



十代田城の朝 巖山大觀堂

舊御茶屋

分を起させた。



一 明治神宮

いふ大木の樫も此の御苑内にあるのだ。

私はその一つ一つを拜見して廻つて、涙ぐましい程の強い感激に打たれながら、夕暮近くなつて御門を出た。振返つて見ると、神殿のあたりは、すっかりもう深い靄に包まれて、黒々と晝でも暗いほど生ひ茂つてゐる樹林の中を、かつきりと切開いたやうに、路線の白い色が暮残つて續いて見えるのが、妙に嚴肅な氣

横山大觀 (明治元年生)

名は秀麿、水戸の人、岡倉覺三につきてその啓蒙をうけ、美術學校教授となる。はじめ文展の審査員なりしが大正三年脱退し、かつて創立せし日本美術院を下村觀山と共に再興せり。現今その同人として毎年優作を出し、畫壇に活躍す。木圖は三尺巾絹本横物にしてよく千代田城の幽邃をうつし、暮の一片に畫全體をひきしめて強し。明治神宮の莊嚴と相俟ち涙々ぼるゝかたじけなきをこの城の朝に感ぜしむ。



私の胸には、その神祕な境の中に、ほんのりと浮かんで見える素木造の神殿と、檜皮葺の屋根を美しく流れてゐる優雅な曲線とが、神域を出てからも、いつまでも長く鑄附けられたやうに残つてゐた。

一草一木の末にも祭神二柱の御威靈の宿つてゐる森嚴と、幽邃と、優雅との神苑よ。長い私の一生を通じて、果してこの深い印象を忘れる日があるだらうか。(明治神宮紀)

明治神宮紀  
一頁―九頁、大  
正九年十一月、大  
日本評論社發  
行。

田邊尙雄  
大阪の人。東京  
帝國大學理科出  
身。音樂研究家。

## 二 國歌の話

田邊 尙 雄

一國の音樂が、どれほどその國の人情に左右されるかといふことは、國歌などを見ると最もよくわかる。實に國歌

の比較は、一面には國々の國體を比較することにもなり、又その國民の氣風性質などを知る便ともなる。今試に西洋の三大音樂國といはれてゐるイタリア、フランス、ドイツの國について、その國歌を較べて見よう。

最初まづフランスの國歌マルセイユ曲に就いて考へて見ると、これには貴族的好尚に對する反抗が表れてゐて、甚だしく平民的傾向を帯びて居る。随つて國歌の上に尊嚴といふものがない。そのかはり感情は實に遺憾なく表れて居る。一體感情を極端に表すといふことが、フランス音樂の一つの特徴となつて居るのであるが、この國歌には、殊にこれが著しい。この意味でマルセイユ曲は、眞にフラン

Italia  
フランス  
Deutsch  
ドイツ  
La Marseillaise  
マルセイユ曲

ドイツの國歌  
世界大戰以前に  
 ドイツ帝國に於  
 て行はれたる國  
 歌。

ス人民を代表する國歌として、ふさはしいものである。次にドイツの國歌を見ると、これは全くフランスの反對である。ドイツ國民は頗る剽悍勇猛であると同時に、又理性が明らかで、徒に感情に走らない。随つて感情中心のフランス音樂などとは大いに違つて居る。この國には古來愛國的歌謠が頗る多いが、その愛國心といふのがまた我が國や、イギリス・ロシアなどと大いに考へ方が違つて居る。我が國は全然皇室中心主義であつて、愛國といふことはすなはち皇室を尊重することである。然るにドイツの愛國は、自國が他國に對して戰勝を得ることを喜ぶといふだけの思想から起つた愛國心である。随つて國歌は皇室尊崇

などよりは他國に對する威壓を以て第一の目的として居るのである。この點がドイツ國歌の特徴である。それに準國歌たる「ラインの守」及び同じく準國歌たる「ドイツ人の祖國は何處か」を見るとよくわかる。

かやうにドイツの國歌とフランスの國歌を比較すると、ドイツのが威壓的であるのに反して、フランスのは反抗的である。ドイツのが理性的であるのに反して、フランスのは感情的である。實にこの兩國の國歌を見ただけで、歐洲大戦争の光景が目に見えるやうに感ぜられる。

翻つてイタリアはどうであるか。普通イタリアの國歌といへば、「ロイヤルマーチ、オヴ、イタリア」と稱せられる軍歌

風の進行曲であつて、歌ではない。これはなか／＼面白く、愉快に出来ては居るが、威嚴とか尊嚴などといふ感じは少しもない。餘り巧に作り過ぎてあつて、國民の眞情が流露して居るといふ様が少しも見えて居ない。これは全くこの國の歴史によるのである。イタリアが現今のやうに統一された帝國となつたのは、今から僅か六十年ほど前であつて、その時から初めて國家といふ觀念が急に勃興し、隨つて愛國の歌謠も現れて來た。國歌のローヤルマーチはこの時に生じたのである。けれども元來永い間の精神修養によつて出來た愛國心ではなくて、歴史上の變動の爲に急に現れて來たものであるから、どうも國民の眞情が流露し

林廣守  
宮内省雅樂部副  
長。明治二十九  
年歿。年六十  
六。

てゐない憾がある。且イタリアでは從來音樂が頗る發達して作曲法の技も進んで居たものだから、國歌が内容よりも寧ろ形式に流れてしまつて、國歌としては餘りに曲が上手過ぎ飾り過ぎてゐる。さして日本の國歌はどうであらうか。

「君が代」は、宮内省雅樂部の林廣守の作曲で、割合に新しいものであるにかゝらず、イタリアのとは大いにその性質を異にして居て、非常に尊嚴なものである。今日我が國の國旗なる旭日の意匠と、國歌なる「君が代」の旋律とは確に世界に對して我が國の威嚴を示す表徴となつて居るといつてよい。「君が代」の作曲は一度外國人が手を着けたけれ

ども、不成功に終つた。その後、林氏が全然古代の雅樂に則つて作られたのが、現今の「君が代」である。我が國歌が、かゝる宮中の雅樂師、しかもその老輩の手に成つたといふのは、ちよつと異様であるが、實はそれが我が國の大幸福であつたのである。

一體我が國上代の音樂は、眞の大和民族の眞情を流露した音樂である。かの神武天皇御作の久米舞などは、いかにも雄大且莊嚴なもので、これを宮中の饗宴に於て拜する外國の使臣は、皆その結構の雄大さに驚嘆するといふことである。かやうに、大和民族本來の特性を失はずに、それにもふさはしい形式の備つた音樂がいはゆる雅樂である。

さうしてこれを大體保留して傳へて居た宮中の雅樂師が、「君が代」を作曲したのであるから、それが大和民族本來の性情を具へて居て、しかも形式に於てかなり立派なものであるといふのは、當然のことである。

(音樂通論)

音樂通論

上卷「音樂に對する準備智識」大正七年十月、誠文堂發行。

徳富蘆花

名は健次郎、熊本縣の人、小説家。昭和二年九月歿、年六十。

我が家はこゝに永遠を思ふに足る。

三 我が家の富

徳富蘆花

(一)

家は十坪に過ぎず、庭はただ三坪、誰かいふ狭くしてかつ陋なりと。家陋なりと雖も、膝を容るべく、庭狭きも碧空仰ぐべく、歩して永遠を思ふに足る。

神の月日はこゝにも照れば、四季も來り見舞ひ、風・雨・雪・霰

三 我が家の富

かはるがはる到りて興淺からず。蝶兒來りて舞ひ、蟬來りて鳴き、小鳥來り遊び、秋蛩亦吟ず。靜かに觀ずれば、宇宙の富は殆ど三坪の庭に溢るゝを覺ゆるなり。

(二)

庭に一株の老李あり。春四月の頃ともなれば、青白き花開いて樹に滿つ。風ある日には、青々と霞める空より、白き花ちらくくと舞ひて、一庭須臾に雪を散らす。

隣家に花樹多し。風に隨ひて飛花我が庭に落つ。紅雨霏々、白雪紛々、見るがうちに滿庭花の衣を着く。仔細に見れば、桃の花あり、櫻あり、椿の花あり、山吹の花あり、李の花あり。

(三)

庭隅に一株の山梔あり。五月闇鬱陶しき頃、香しき白花を開く。主も妻も無口なれば、この花の我が家に開くは宜なりけり。

老李の背後に一株の碧梧あり。

碧幹亭々として、些の邪なく、吾が如く直かれと教ふるに似たり。梧葉と手水鉢の側なる金剛纂は、葉濶う



して、我が家の雨聲を多からしむ。

李熟して白粉ふきたる琥珀玉の滾々と地に落つる頃は、與へて喜ぶ男の子一人欲しと思ふ心も起りぬ。

(四)

つく／＼ぼふしの聲に、世は何時か秋  
 に入りて、山茶花咲き、三尺ばかりの楓も  
 紅に燃えいで、ただ一株前の家主の植ゑ  
 のこしたる黄菊も咲出づ。名苑の花美  
 しといふとも、秋のあはれ閑寂の趣は却  
 つて我が庭の一枝にあるべし。蛻巖の  
 翁なりせば、「獨憐細菊近荆扉」とや吟ぜん。  
 耻づらくは、「海内文章落布衣」と唱すべき  
 身にあらざるを。

屋後に一株の銀杏あり。秋深くして



閑庭の圖

蛻巖

梁田蛻巖。明石藩の儒者。寶曆七年(一四一七)歿、年八十六。

獨憐細菊近荆扉

我樹雲に連なり、秋色飛ぶ。獨憐、細菊の荆扉に近きを。高きに登りて能く

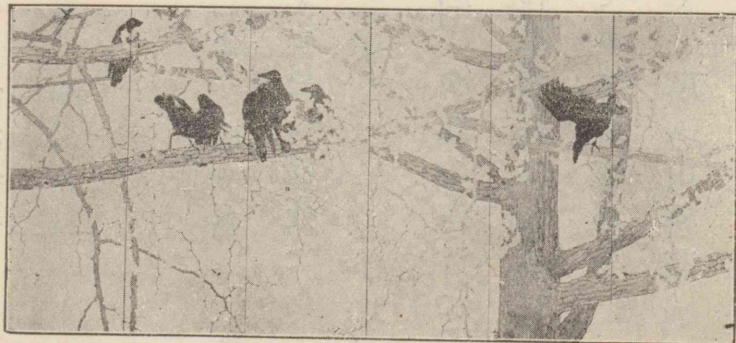
賦する、今誰か是ぞ。海内の文章布衣に落つ。かぐや姫竹取物語の主人公。

右 同

滿樹金よりも黄なり。木枯の風起れば、  
 かぐや姫の扇にせま欲しきその葉翻々  
 として翻り落つ。半夜夢さめて、雨かと  
 疑ひ、曉に起きて戸を開けば、庭は一夜に  
 金色となりぬ。屋根も、庇も、手水鉢も、所  
 として落葉ならざるはなく、紅葉さへ落  
 添ひて、寸金と人はいふなる錦を我は庭  
 に敷きぬ。

(五)

木の葉落盡くしては、さすがに寂しげ  
 なるにも、日影月影愈多くなりて、空を見



蘆花全集

第三卷「自然と人生」一九七頁、昭和四年二月、蘆花全集刊行會發行。

星を見るに障少きはうれし。

(蘆花全集)

四 短歌

落合直文

落合直文

宮城縣の人、國文學者、明治三十六年歿、年四十三。

父君よ今朝はいかにと手をつきて問ふ子を見れば死なれざりけり  
霜やけの小さき手して蜜柑むく我が子忍ばゆ風の寒きに  
山寺の石のきざはしおりくれば椿こぼれぬ右にひだりに  
町中の火の見櫓に人ひとり火を見て立てり冬の夜の月  
緋緘のよろひをつけて太刀はきて見ばやと思ふ山櫻花

(落合直文集)

落合直文集

昭和二年十一月、明治書院發行。

石川啄木

名は一、岩手縣の人、歌人、明治四十五年歿、年二十七。

石川 啄木

呆れたる母の言葉に氣がつけば茶碗を箸もてたゝきてありき  
たんたらたらたんたらたらと雨垂が痛むあたまにひびくかなしさ  
あさ風が電車のなかに吹入れし柳のひと葉手にとりて見る  
ひと晩に咲かせて見むと梅の鉢を火にあぶりしが咲かざりしかな  
わかれをれば妹いとしも赤き緒の下駄など欲しとわめく子なりし

(啄木選集)

啄木選集

大正七年九月、新潮社發行。

森 鷗外

名は林太郎。石見國津和野の人、文學者、醫學博士。大正十一年歿、年六十一。

石 浦

丹後國加佐郡由良町の大字、山椒大夫の屋敷跡といはるゝもの現存す。

由良の湊

舞鶴と宮津の中間にある小港。

大雲川

由良川ともいふ。福知山の方より來り由良の港に注ぐ。

中山

大雲川の右岸、由良の南一里。

山舟 九夫

人の世はまじきものなり

五 厨子王

森 鷗外

安壽は山の頂に立つて、南の方をじつと見てゐる。目は、石浦を経て由良の港に注ぐ大雲川の上流を辿つて、一里ばかり隔つた川向ふに、こんもりと茂つた木立の中から、塔の尖の見える中山に止つた。そして、「厨子王や。」と弟を呼びかけた。

「わたしが久しい前から考へ事をしてゐて、お前ともいつもの様に話をしないのを變だと思つてゐたでせうね。もうけふは柴なんぞを刈らなくても好いから、わたしの言ふ事を好くお聞き。あの中山を越して往けば、都がもう近い

のだよ。筑紫へ往くのはむづかしいし、引返して佐渡へ渡るのも、たやすい事ではないけれど、都へはきつと往かれます。おかあ様と御一しよに岩代を出てから、わたしどもは恐しい人ばかり出逢つたが、人の運が開けるものなら、善い人に出逢はぬにも限りません。お前はこれから思ひ切つて、この土地を逃延びて、どうぞ都へ上つておくれ。神佛のお導で、善い人にさへ出逢つたら、筑紫へお下りになつたおとう様のお身の上も知れよう。佐渡へおかあ様のお迎に往くことも出来よう。籠や鎌は棄てて置いて、標子だけ持つて往くのだよ。」

厨子王は黙つて聞いてゐたが、涙が頬を傳つて流れて來



た。「そして、ねえさん、あなたはどうしようといふのです。」  
「わたしの事は構はないで、お前一人でする事を、わたしと一緒にする積りでしておくれ。おとう様にもお目に掛り、おかあ様をも島からお連れ申した上で、わたしをたすけに來ておくれ。」

「でも、わたしが居なくなつたら、あなたを酷い目に逢はせませう。」厨子王が心には烙印をせられた恐しい夢が浮ぶ。「それはいちめるかも知れないがね、わたしは我慢して見せませす。金で買った婢をあの人は殺しはしません。多分お前がなくなつたら、わたしを二人前働かせようとすゝるでせう。お前の教へてくれた木立の所で、わたしは柴を

澤山刈ります。六荷までは刈れないでも、四荷でも五荷でも刈りませう。さああそこまでおりて行つて、籠や鎌をあそこに置いて、お前を麓へ送つて上げよう。」かう云つて安

壽

壽は先に立つておりて行く。

枯翼過河泣何時悔復  
及作書与歎興相教慎  
出入

丙辰春日 鷗外港

厨子王はなんとも思ひ定めかねて、ぼんやりして附いておりる。姉は今年十五になり、弟は十三になつてゐるが、女は早くおとなびて、その上ものに憑かれたやうに、

聴く賢しくなつてゐるので、厨子王は姉の詞に背くことが出來ぬのである。

木立の處までおりて、二人は籠と鎌を落葉の上に置いた。姉は守本尊を取出して、それを弟の手に渡した。「これは大事なお守だが今度逢ふまでお前に預けます。この地藏様をわたしだと思つて、護刀と一しよにして、大事に持つてゐておくれ。」

「でも、ねえさんにお守がなくては。」

「いゝえ。わたしよりはあぶない目に逢ふお前にお守を預けます。晩にお前が歸らないと、きつと、討手が掛ります。お前が幾ら急いでも、あたり前に逃げて行つては、追附かれるに極つてゐます。さつき見た川の上手を和江と云ふ處まで往つて、首尾好く人に見附けられずに、向河岸へ越して

和江

丹後加佐郡丸八江村の大字、大雲川の左岸中山の向ひ、由良の南一里。

しまへば、中山までもう近い。そこへ往つたら、あの塔の見えるてゐたお寺に這入つて隠しておもらひ。暫くあそこに隠れてゐて、討手が歸つて來たあとで寺を逃げてお出で。」

「でもお寺の坊さんが隠して置いてくれるでせうか。」

「さあ、それが運だめしだよ。開ける運なら、坊さんがお前を隠してくれませう。」

「さうですね。ねえさんの今日おつしやる事は、まるで神様か佛様がおつしやるやうです。わたしは考を極めました。なんでもねえさんのおつしやる通りにします。」

「おう、好く聽いておくれた。坊さんは善い人で、きつとお前を隠してくれます。」

「さうです。わたしにもさうらしく思はれて來ました。逃げて都へも往かれます。おとう様やおかあ様にも逢はれます。ねえさんのお迎にも來られます。」厨子王の目が姉と同じ様に輝いて來た。

「さあ、麓まで一緒に行くから早くお出で。」

二人は急いで山をおりた。足の運びも前とは違つて、姉の熱した心持が、暗示のやうに弟に移つて行つたかと思はれる。

泉の湧く處へ來た。姉は櫛子に添へてある木の椀を出して、清水を汲んだ。「これがお前の門出を祝ふお酒だよ。」かう云つて一口飲んで弟にさした。

弟は椀を飲みほした。

「そんならねえさん。御機嫌好う。きつと人に見附からずに、中山まで參ります。」

厨子王は十歩ばかり残つてゐた坂道を、一走りに駆けおりて、沼に沿うて街道に出た。そして大雲川の岸を上手へ向つて急ぐのである。

安壽は泉の畔に立つて、並木の松に隠れては又現れる後影を小さくなるまで見送つた。そして日は漸く午に近づくの山に登らうともしない。幸に今日はこの方角の山で木を樵る人がないと見えて、坂道に立つて時を過す安壽を見咎めるものもなかつた。

山椒大夫  
由良の石浦に  
し長者。五子の  
うち三郎最も暴  
戻なり。

後に同胞を捜しに出た山椒大夫一家の討手が、この坂の下の沼の端で小さい藁履を一足拾った。それは安壽の履であつた。

中山の國分寺の三門に、松明の火影が亂れて、大勢の人が込入つて来る。先に立つたのは、白柄の薙刀を手挟んだ山椒大夫の息子三郎である。

三郎は堂の前に立つて大聲に云つた。「これへ參つたのは石浦の山椒大夫が族のものぢや。大夫が使ふ奴の一人がこの山に逃込んだのを、だしかに認めたものがある。隠れ場は寺内より外にはない。すぐにこゝへ出して貰はう。」

附いて來た大勢が、「さあ出して貰はう。出して貰はう。」と叫んだ。

本堂の前から門の外まで、廣い石疊が續いてゐる。その石の上には、今手にく、松明を持った三郎の手のものが押合つてゐる。又石

疊の兩側には、境内に住んでゐる限の僧俗が、殆ど一人も残らず簇つてゐる。

これは討手の群が門外で騒いだ時、内陣からも、庫裡からも、何事が起つたかと



厨子王安壽姫

怪しんで出て來たのである。

初め討手が門外から門を開けいと叫んだ時、開けて入れたら亂暴をせられはしまいかと心配して、開けまいとした僧侶が多かつた。それを住持曇猛律師が開けさせた。併し今、三郎が大聲で逃げた奴を出せと云ふのに、本堂は戸を閉ぢた儘暫くの間ひつそりしてゐる。

三郎は足踏をして、同じ事を二三度繰返した。手のものの中から、「和尚さん、どうしたのだ。」と呼ぶものがある。それに短い笑聲が交る。

やう／＼の事で本堂の戸が靜かに開いた。曇猛律師が自分で開けたのである。律師は偏衫へんしん一つ身に纏つて、なん

の威儀をも繕はず、常燈明の薄明りを背にして本堂の階の上に立つた。丈の高い頑丈な體と眉のまだ黒い廉張つた顔とが、揺めく火に照らし出された。律師はまだ五十歳を越したばかりである。

律師は徐ろに口を開いた。騒がしい討手の者も律師の姿を見ただけで黙つたので、聲は隅々まで聞えた。「逃げた下人を捜しに來られたのぢやな。當山では住持のわしに言はずに人は留めぬ。わしが知らぬから、そのものは當山にゐぬ。それはそれとして、夜陰に劔戟を執つて多人數押寄せて參られ、三門を開けといはれた。さては國に大亂でも起つたか、公の叛逆人でも出來たかと思つて、三門を開け

させた。それになんぢや。御身が家の下人の詮議か。當山は勅願の寺院で、三門には勅額を懸け、七重の塔には宸翰金字の經文が藏めてある。こゝで狼藉を働かれると、國守は檢校の責を問はれるのぢや。又總本山東大寺に訴へたら、都からどのやうな御沙汰があらうも知れぬ。そこを好う思うて見て、早う引取られたが好からう。悪い事は言はぬ。お身達のためぢや。」かういつて律師はしづかに戸を締めた。

三郎は本堂の戸を睨んで齒咬をした。併し戸を打破つて踏込むだけの勇氣もなかつた。手のものどもは唯風に木の葉のざわつくやうに囁きはしてゐる。

この時大聲で呼ぶものがあつた。「その逃げたといふのは、十二三の小わつばぢやらう。それならわしが知つてをる。」

三郎は驚いて聲の主を見た。父の山椒大夫に見まがふやうな親爺で、この寺の鐘樓守である。親爺は詞を續いていつた。「そのわつばはな、わしが午頃鐘樓から見てをると、築地の外を通つて南へ急いだ。かよわいかはりには身が軽い。もう大分の道を行つたぢやろ。」

「それぢや。半日に童の行く道は知れたものぢや。續け。」といつて三郎は取つて返した。

松明の行列が寺の門を出て、築地の外を南へ行くのを鐘

樓守は鐘樓から見て、大聲で笑つた。近い木立の中で、やうやう落着いて寝ようとした鴉が二三羽、また驚いて飛立つた。

田邊  
今の丹後國加佐郡舞鶴町。

あくる日に國分寺からは諸方へ人が出た。石浦に往つたものは、安壽の入水水のチハゴヨつて戻したの事を聞いて來た。南の方へ往つたものは、三郎の率ゐた討手が田邊まで往つて引返した事を聞いて來た。

中二日置いて、曇猛律師が田邊の方へ向いて寺を出た。

盃盃ほどある鐵の受糧器盃を持つて、腕の太さの錫杖を衝いてゐる。跡からは頭を剃りこくつて三衣を着た厨子王が附

物をもつて  
と入つて  
てつばつと

いて行く。

朱雀野  
山城國葛野郡に屬す。京都市の西部、昔の朱雀大路。

二人は眞晝に街道を歩いて、夜は處々の寺に泊つた。山城の朱雀野朱雀野に來て、律師は權現堂権現堂で休んで、厨子王にわかれ

た。「守本尊を大切に<sup>て</sup>して往け、父母の消息はきつと知れる。」と言聞かせて、律師は踵踵を施した。亡くなつた姉と同じ事を言ふ坊様だと、厨子王は思つた。

都に上つた厨子王は、僧形になつてゐるので東山の清水寺に泊つた。

籠堂籠堂に寝て、あくる朝目が覺めると、直衣直衣に烏帽子烏帽子を着て指貫指貫を穿いた老人が、枕元枕元に立つてゐて云つた。「お前は誰

清水寺  
京都市の東山にある寺。本尊は觀世音。

師 實

關白太政大臣藤原師實、後三條堀河兩帝に仕ふ。康和三年(一七六一)薨、年六十一。  
安樂寺 古、筑前國筑紫郡太宰府町太宰府神社の地にありき。

の子ぢや。何か大切な物を持つてゐるなら、どうぞ己おれに見せてくれい。己は娘の病氣の平癒を祈るために、ゆふべここに參籠まゐりした。すると夢にお告たまがあつた。左の格子まがらみに寝てゐる童が好い守本尊を持つてゐる。それを借りて拜ませいといふ事ぢや。けさ左の格子に來て見れば、お前がゐる。どうぞ己に身の上を明かして、守本尊を貸してくれい。己は關白師實ぢや。」

厨子王はいつた。「わたくしは陸奥掾正氏といふものの子でございます。父は十二年前筑紫の安樂寺へ往つたきり歸らぬさうでございます。母はその年に生れたわたくしと三つになる姉とを連れて、岩代の信夫郡のぶのに住むことに

なりました。そのうちわたくしがだいぶ大きくなつたので、姉とわたくしとを連れて、父を尋ねに旅立ちました。越後まで出ますと、恐しい人買あひに取られて、母は佐渡へ、姉とわ



たくしとは丹後の由良へ賣られました。姉は由良でなくなりました。わたくしの持つてゐる守本尊はこの地藏様でございませう。」かう云つて守本尊を

出して見せた。

師實は佛像を手に取つて、先づ額に當てるやうにして禮



高見王  
桓武天皇の皇子  
葛原親王の王  
子、平氏の祖。

永保  
白河天皇の御  
代(一七四一—  
一七四三)

をした。それから面背を打返し、丁寧に見ていった。「これはかねて聞及んだ、尊い放光地藏菩薩の金像ぢや。百濟國から渡つたのを、高見王が持佛にしておいでなされた。これを持傳へてをるからは、お前の家柄に紛れない。仙洞がまだ御位にをらせられた永保の初に、國守の違格に連坐して、筑紫へ左遷せられた平正氏が嫡子に相違あるまい。若し還俗の望があるなら、追つては受領の御沙汰もあらう。先づ當分は己の家の客にする。己と一しよに館へ來い。」

師實は厨子王に還俗させて、自分で冠を加へた。同時に

罪のちうもりのまゝか  
くしころ

正氏が謫所へ赦免狀を持たせて、安否を問ひに使を遣つた。併しこの使が往つた時、正氏はもう死んでゐた。元服して正道と名告つてゐる厨子王は、身の糞れる程歎いた。その年の秋の除目に、正道は丹後の國守にせられた。國守は最初の政として、丹後一國で人の賣買を禁じた。そこで山椒大夫も悉く奴婢を解放して、給料を拂ふことにした。大夫の家では一時それを大きい損失のやうに思つたが、この時から農作も工匠の業も前に増して盛になつて、一族はいよゝ富榮えた。國守の恩人曇猛律師は僧都にせられ、安壽が亡き迹は懇に弔はれ、又入水した沼の畔には尼寺が立つことになつた。

假寧 休暇の事、古へ  
官人に賜はる休  
暇。

雜太 佐渡國雜太郡今  
は佐渡郡に入  
る。國府は佐渡  
島の中部國府川  
のほとりなりし  
なるべし。

正道は任國のためにこれだけの事をして置いて、特に假寧にやを申し請うて、微行して佐渡へ渡つた。

佐渡の國府は雜太さと云ふ所にある。正道はそこへ往つて、役人の手で國中を調べて貰つたが、母の行方は容易に知れなかつた。

或日正道は思案に暮れながら、一人旅館を出て市中を歩いた。そのうちいつか人家の立並んだ所を離れて、畑中の道に掛つた。空は好く晴れて日があかくと照つてゐる。正道は心の中に、「どうしておかあ様の行方が知れないのだらう、若し役人なんぞに任せて調べさせて、自分が捜し歩かぬのを神様が憎んで逢はせて下さらないのではあるまい

か。」などと思ひながら歩いてゐる。ふと見れば、だいぶ大きい百姓家がある。家の南側の疎らな生垣の内が、土を敲き固めた廣場になつてゐて、その上に一面に蓆が敷いてある。蓆には刈取つた粟の穂が干してある。その真中に、襪褌を着た女がすわつて、手に長い竿を持つて、雀の來て啄むのを逐つてゐる。女は何やら歌のやうな調子でつぶやく。正道はなぜか知らず、この女に心が牽かれて、立止まつて覗いた。女の亂れた髪は塵に塗れてゐる。顔を見れば盲である。正道はひどくあはれに思つた。そのうち女のつぶやいてゐる詞が、次第に耳に慣れて聞分けられて來た。それと同時に正道は瘧病マラリアのやうに身内が震つて、目には涙

が湧いて來た。女はかういふ詞を繰返してつぶやいてゐたのである。

安壽戀しや、ほうやれほ。

厨子王戀しや、ほうやれほ。

鳥も生あるものなれば、

疾うく逃げよ、逐はずとも。

正道はうつとりとなつて、この詞に聞惚れた。そのうち臟腑が煮え返るやうになつて、獸めいた叫が口から出ようとすると、齒を食ひしばつてこらへた。忽ち正道は縛られた繩が解けたやうに垣の内へ駈込んだ。そして足には粟の穂を踏散らしつゝ、女の前に俯伏した。右の手に守本

尊を捧げ持つて、俯伏した時に、それを額に押當ててゐた。

女は雀でない、大きいものが粟をあらしに來たのを知つた。そしていつもの詞を唱へ罷めて、見えぬ目でじつと前を見た。その時干した貝が水にほとびるやうに、兩方の目に潤ひが出た。女は目が開いた。

「厨子王」と云ふ叫が女の口から出た。二人はびつたり抱合つた。

(鷗外全集)

鷗外全集  
第四卷「山椒大  
夫」五〇八頁―  
五一八頁。大正  
十四年一月、鷗  
外全集刊行會發  
行。

芥川龍之介

東京の人、東京  
帝國大學文科出  
身。小説家。昭  
和二年歿、年三  
十六。

## 六 動物園

芥川龍之介

鶴の鳥

あの頸をさ、襟飾のやうに結んでしまつたら、一體どうし

てほどく氣なんだらう。

カンガルー

腹の袋の中には子供が一匹はいつてゐる。あれを出してしまつても、まだ英吉利の旗か何か、手品のやうに出て來はしないか。

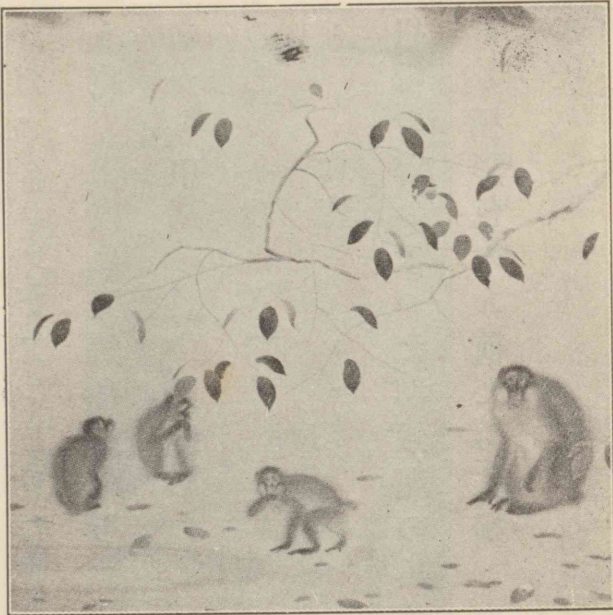
鸚哥

お前は古い唐畫の桃の枝に、じつと止つてゐるが好い。うっかり羽搏でもしようものなら、體の繪の具が剥げてしまふから。

猿

猿よ。お前は一體泣いてゐるのか、それとも亦笑つてゐ

るのか。お前の顔は悲劇の面のやうで、同時に又喜劇の面



のやうだ。私の記憶は縁日の猿芝居へ私を連れて行く。櫻の釣板、張子の鐘、それからアセチリン、瓦斯の神経質な光。お前は金紙の烏帽子をかぶつて、緋鹿子の振袖をひきずりながら白拍

子の役を勤めてゐる。私の胸に始めて疑團が萌したのは、正にその白拍子たるお前の顔へ、偶然の一瞥を投げた時だ。

六動物圖

トラヂック、コ  
メデア  
ン

Tragic-Comedian  
悲劇的喜劇  
役者。

お前は一體泣いてゐるのか。それとも又笑つてゐるのか。猿よ。人間よりもより人間的な猿よ。私はお前程巧妙なトラヂック、コメデアンを見た事がない。——私が心の中でかう呟くと、猿は突然身を躍らせて、私の前の金網にぶら下りながら、甲高い聲で問返した。「ではお前は？ え、お前のそのしかみ面は？」

鴛鴦

胡粉の雪の積つた柳、銀泥の黒く焼けた水、其の上に浮んでゐる極彩色のお前たち夫婦。——お前たちの畫工は伊藤若冲だ。

鹿

伊藤若冲  
京師の畫家。名  
は汝鈞 若冲又  
斗米菴と號し、  
特に鷄畫に巧な  
り。寛政十二年  
(一四六〇)歿、  
年八十五。

この見事な刀掛には、葵の御紋散らしの大小でも恭しく掛けて置くがよい。

南京鼠



上衣は白天鷲絨、眼は石榴石、それから手袋は桃色繻子。——お前達は皆可愛らしい、支那美人そつくりだ。後宮の佳麗三千人と言ふと、私は何時もお前達が、重なり合つた樓閣の

楊  
貴  
妃

西施  
越の美女。

楊貴妃  
唐の玄宗の妃。

中に、巢を食つた處を想像する。そら西施が芋の皮を噛つてゐると、楊貴妃は一生懸命に車を廻してゐるぢやないか。

金魚

薄日の光が射して來ると、藻に立

つた秋も目立つやうになつた。

私は、——處々鱗の剥げた金魚は、

やがてこの冷たい水の上に、屍を

曝す事になるかも知れない。し

かしさういふ最後の日までは、やはり

先の切れた尾を振りながら悠々と泳いでゐようと思ふ。

蒼鷺

何でも雨上りの葉柳の匂が、川面を蒸してゐる時だつた。お前は其の柳の梢に、たつた一羽止まつてゐたが、夕焼小焼、あした天氣になあれ。——そんな唄を謡つて通つた、子供の時の私を覚えてゐるかね。

金絲雀

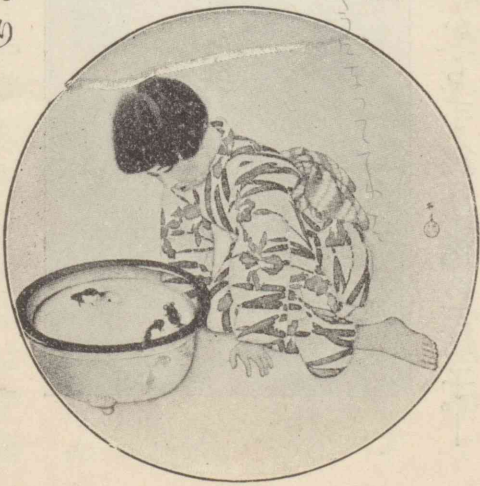
理髮店の店さきには、朝日の光が爽かに、萬年青の鉢を洗つてゐる。

鉄の音、水の音、新聞紙を擴げる音、——その音の中に入るのは、籠一杯に飛びまはるお前たちの囀り聲——誰だね、今親方に挨拶した人は？

(芥川龍之介全集)

芥川龍之介全集

第五卷「動物園」  
一七九頁—一八  
九頁、昭和三年  
三月、岩波書店  
發行。



長塚節

茨城縣結城郡岡田村の人。歌人、小説家。大正四年歿。年三十七。

鬼怒川 利根川の一支流。

芋掘

七 芋掘

長塚節

小春の日光は岡の畑一杯にさしかけてゐる。岡は田と櫟林と鬼怒川の土手とでかこまれて、他の一方は村から村へ通ふ街道へおりる。田は岡に沿うて狭く連なつてゐる。田圃を越して竹藪交りの村の林が田に沿うて延びてゐる。竹藪の内から草家がぼつぼつと隠見する。箒草を中途から伐離したやうに枝を擴げた櫟の木が、そこにもこゝにもすく／＼と突立つてゐる。

田にはもう掛稻は稀で、稻を掛けた竹の「おだ」がまだ外されずに立つてゐる。「おだ」には黄昏に鳴でも來て止るくらゐのことであるだらう、見るから寂しげである。

鬼怒川の土手には篠が一杯に茂つて居るので、近くの水はその蔭に隠れて見えぬ。のぼる白帆は篠の梢に半分だけ見えて、しかも大きい。土手の篠を越えて、水がしら／＼と見えるあたりは、もう遙かの上流である。だから、篠の梢を離れて、高瀬船の全形が見える頃は、白帆は遙かに小さく縮まつてゐる。土手の篠の上には、對岸の松林が連なつて見える。更にその上には、筑波山が一脚を張つて、他の一脚を上流まで延して聳えてゐる。小春の筑波山は常磐木の部分を除いては、赭く焦げたやうである。その赭い頂上に點を打つたやうに觀測所の建物がぼつちりと白く見える。

田園



稍不透明な空氣は、なほ針の先でつ  
つくやうにその白い一點を際立つ  
て眼に映ぜしめる。櫟の林は、この  
狭く連なつて居る田と鬼怒川との  
間をつないで、横に續いて居る。田  
も遙かのさきは櫟林に隠れて鬼怒  
川も上流はいつか櫟林に見えなく  
なる。櫟の木はびつしりと赭い葉  
がくつついて居る。岡の畑は向ふ  
へいくらか傾斜をなして居るので、  
中央に立つてみると、櫟の林は半ば

雨毛  
上アケ  
下アケ  
上野  
下野

隠れて、低い土手のやうに連なつて見える。林の上には、雨  
毛の山々が雪を載いて、それがぼんやりと白い。

かくの如き周圍を有して、岡の畑は朗かに晴れてゐるの  
である。土は乾き切つて、既に二三寸に伸びた麥は、岡一杯  
に薄く綠青を塗つたやうである。そこにもこゝにも百姓  
が小さく動いてゐる。麥の畝をうつて居る者もあるが、大  
抵は芋掘の人々である。四五人の手で芋を掘つて居る畑  
の縁には馬が茶の木に繋いであつて、俵が轉つて居る。こ  
の俵があれば、遠くからも芋掘の人々であることがわかる。  
馬は退屈まぎれに茶の木をむしることがある。その時、一  
人が駈けて來て、轡をがちんと一つ極めつけて叱り飛ばせ



ば、またおとなしくなつて、ばさりばさりと尾を動かして居るのである。

各自の手もとは忙しい。併し、岡はただ長閑なさまである。日は稍傾いた。忽然、筑波山の絶頂から眩い光がきらきらとさして來た。毎日同一の時刻に、この光はこの岡へ強くさしかけて來る。百姓の或者は、筑波山で火を燃すのだらうなどといつて居る。併し、それは、觀測所の硝子窓が日光を反射するのである。岡の畑に變化が起つたとすれば、數時間にただこれだけである。硝子窓の反射はやがて消えてしまつた。芋掘の人々は勿論この光は知らなかつた。

筑波山  
茨城県常陸國に  
あり。

兩毛の山々がぼんやりした日は、西風が吹かないので、随つて暖かい。暖かい日は、土いじりの芋掘にはこの上もない日和である。街道への下り口の小さな畑でも、一組、芋を掘つて居る。その隣の桑畑では葉が大方落ちて、芋畑へも散らばつてゐる。青い弱々した小麥が生えだして居る。小麥は芋の間に二畝づつ蒔かれてある。芋の莖はぐつたりと茹でた様である。女は芋の莖を菜刀で本から切つて先へ出る。菜刀といふのは、庖丁のことである。後から男が鋏の先で芋の株を掘起す。びかびかと光る鋏の先をざくつと芋の株へ斜に突立てて、ぐつと鋏を持上げると、大きな土の塊がふはりと浮上る。鋏をそつと抜いて先の株へ

移る。小麥へ障らぬやうに極めて丁寧に掘つては先へ先へ行く。女は莖を切終ると、後へ戻つて、掘つてある大きな土の塊を両手で二尺ばかりあげて、どさりと打ちつける。細かな土がほぐれて、こごつた子芋の塊から白い毛のやうな根が、ぞろつと現れる。それから芋と芋とを両手の平でぶりぶりとはがして、やがて俵を立てて入れる。さうして、穴の土を手の先でならして、先の塊をほぐす。乾いた畑にしめつた丸い穴のあとが一つづつ殖えて行く。日光がその土をあとからあとからこまかに乾かして行く。

(長塚節全集)

長塚節全集  
第二卷「芋掘」  
一頁―五頁。大  
正十五年十二  
月、春陽堂發行。

### 八 茹栗

五十嵐 力

私の友人の知合の奥さんの家庭にあつたといふ實際の話である。

或時その奥さんの家で茹栗の御馳走があつた。有合は



せのを茹でたので餘り澤山もなかつたのだらう。奥さんが茹でながら一つ二つと鹽梅見をして居ると、茹であがる時分には大分數が減つてゐた。

その家には、主人の外に四人の子供がゐた。奥さん自身

五十嵐 力

五十嵐 力  
明治七年山形縣  
米澤市に生る。  
早稻田大學教  
授。文學博士。

を入れて六人になるのであるが、六人に分けるには餘りに數が少かつた。そこで奥さんは色々考へたが、さすがに自分には既に食へて居るからと言ひかねたのであらう、こゝが犠牲獻身の母の氣前の見せどころと腹を据ゑて、「お母さんは食へたくありませんから、お前達だけおあがりなさい。」と云つて、六つ七つづつ主人と子供との五人に分けてやつた。主人はかねて公平を主義として居る人であつた。妻君のこの犠牲的の行爲を黙つて見ては居られなかつたのであらう。すぐに子供達に向つて、

「お母さんは自分が食へないで、お前達にやるといふけれども、お母さんに食へさせずに、我々ばかり食へて居ては、少

しも美味くありません。お父さんも出すから、お前達も一つづつ御母さんにお上げなさい。」

と言ふと、一番小さい子が、

「あたい否だ！」

と云つて、すぐに袖で自分の栗をかくした。

その次に、一番大きい子が良くも悪くもない中位なのを出した。その次に二番目の女の子が一番旨さうなのを選つて、

「はい上げます。」

と云つて、静かにお母さんの前においた。最後に三番目の子が、

「さあ！」

と云ふなり、ほんとと蟲の喰つたのを投出した。  
「茹栗一つで四人の根性がすつかりわかりますからね。  
わたしこれを見て、ほんたうにおそろしくなりましたよ。」  
といふのが、その奥さんの懺悔話であつた。

ひそかに物しながら、それを一かどの功名に轉化せしめ  
ようとすする心。家内中同様に樂しまうとする公平の心。  
美味を獨占にしようとすする利己的の心。不承々々に出す  
お交際式の心。やるのもいま／＼しいといふ捨ばちの心。  
一粒の茹栗が淨玻璃の鏡となつて、六人六様の心をうつし  
て居るから面白い。

(甲鳥園隨筆)

淨玻璃の鏡

地獄の閻魔の廳  
にあるといふ  
鏡。これに照ら  
せば亡者生前の  
善惡の所業はそ  
のまゝ映るとい  
ふ。

甲鳥園隨筆

大正十三年、銀  
鈴社發行。

北原白秋

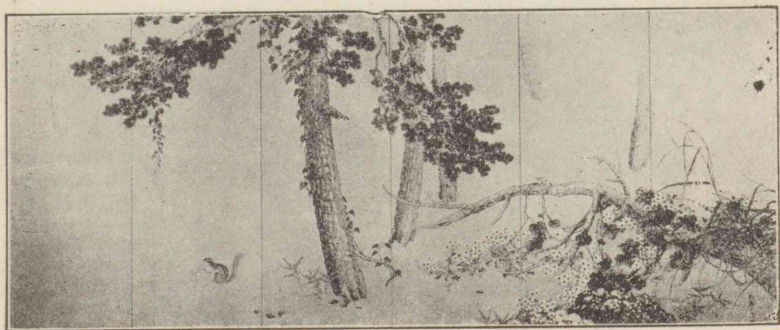
明治十八年福岡  
縣柳河町に生  
る。詩人。

九 落葉松

北原白秋

からまつの林を過ぎて、  
からまつをしみじみと見き。  
からまつはさびしかりけり。  
旅行くはさびしかりけり。

からまつの林を出でて、  
からまつの林に入りぬ。  
からまつの林に入りて、  
また細く道はつつけり。



からまつの林の奥も

わが通る道はありけり。

霧雨のかゝる道なり。

山風のかよふ道なり。

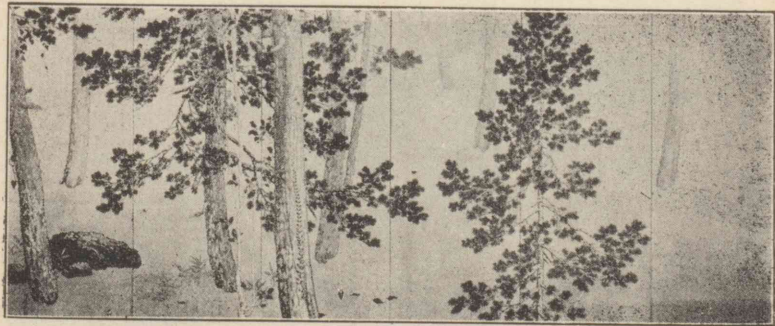
からまつの林の道は

われのみか、人も通ひぬ。

ほそぼそと通ふ道なり。

さびさびと急ぐ道なり。

からまつの林を過ぎて、



浅間嶺  
信濃にある噴火  
山。

ゆるしらず歩みひそめつ。  
からまつはさびしかりけり。  
からまつとさゝやきにけり。

からまつの林を出でて、

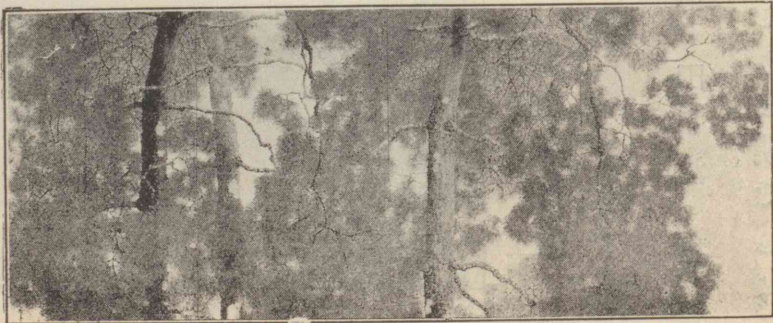
浅間嶺にけぶり立つ見つ。

浅間嶺にけぶり立つ見つ

からまつの又そのうへに。

からまつの林の雨は

さびしけどいよよしづけし。



かんこ鳥鳴けるのみなる。  
からまつの濡るののみなる。

世の中よ、あはれなりけり。  
常なけどうれしかりけり。  
山川に山がはの音、  
からまつにからまつのかぜ。



(水墨集)

水墨集  
二六七頁—二七  
二頁。大正十二  
年六月、アルス  
發行。

薄田泣菫

名は淳介、明治  
十年岡山縣淺口  
郡連島町に生  
る。詩人。大阪毎  
日新聞社囃託。

一〇 道風の見た雨蛙

薄田 泣菫

細かい秋の雨がびしよびしよと降りしきる朝でした。

久しぶりの雨なので、雨蛙はもう家にじつとしてゐられな  
くなつて、上機嫌で散歩に出ました。濡れそぼつた無花果  
の廣い葉からは、甘さうな雫がしたゝり落ちてゐました。  
雨蛙は竹垣の端からその葉の上へひよいと飛び移るなり、  
自慢の咽喉で、

「け、け、け、……」

と一聲鳴いてみました。すると、だしぬけにどこからか、  
「先生。上機嫌ですな。」

と、聲がかゝりました。雨蛙はその聲の主が誰であるか  
をすぐに感づきました。こんな雨の日に外を出歩かうと  
いふものは、自分を取除けては、蟹と蝸牛のほかには誰もゐ

一〇 道風の見た雨蛙

ないのに、蟹はあの通り氣むつかしやで、容易に他人と口を  
きかうともしませんでしたから。

雨蛙はこつそり無花果の葉の裏をのぞき込みました。  
そこには柄のついた雨除け眼鏡をはめた蝸牛がゐました。  
この友達は今日もいつものやうに大がかりに自分の家を  
脊にしよつてゐました。

蝸牛は眼鏡をはづして、雨の雫を拭きとりました。

「だしぬけに變なことを訊くやうだが、お前、人間に近づき  
があるさうだな。」

「人間にか。人間には幾人か近づきがあるよ。私が歌の  
稽古をつけてもらつたのもやつぱり人間だつたよ。」

「もつと外にもある筈だが……たしか小野道風とかいつ  
た……」

「小野道風……」雨蛙は忘れた名前をふるひ出すやうに、二  
三度頭を横にふりました。

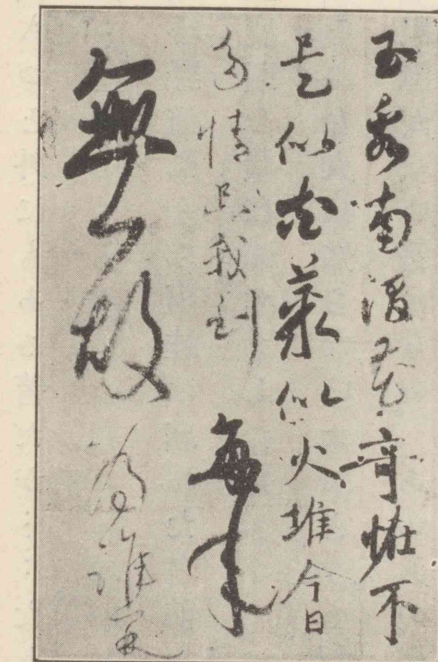
「そんな人は知らないよ。どうも記憶がないやうだ。」

「記憶がない筈はない。あの人の名前をお前に忘れられ  
たら、大變なことになる……」

蝸牛はかう言つて、先刻從弟のなめくちに聞いたことを  
話して聞かせました。

それは小野道風といつた名高い書家が、まだ修業盛りの  
頃、どうも一向藝が上達しないので、すっかり嫌氣がさして、

雨の降るなかを、ぶらぶら散歩に出かけました。ふと見ると、途ばたのしだれ柳の下に雨蛙が一匹ゐて、枝に飛びつかうとしてゐます。幾度か飛んで、幾度か落ちしてゐる末、とうとう骨折のかひがあつて枝に縋りつきました、それを見た道風はすつかり感心しました。



「何事も努力だな。あの蛙が私にそれを教へてくれたのだ。」  
と思つた彼は、家に歸つてから夜を日について、みつちり勉強

道風筆蹟

を重ねました。やがて書道のえらい大家になつたといふ話なのでした。

「何でもその道風とやらは、公卿の次男坊ださうだから、お冠でも着てゐたかも知れない。そんな男の記憶はないか知ら。」

「ある。ある。やつと思ひ出した。ずつと以前にそんな男に出あつたことがあつたつけ。」雨蛙はだしぬけに大きな聲で叫びました。「だが話が少しほんたうのことと違つてゐるやうだ。私は何も道風とやらに教へようと思つて、そんなに骨を折つてゐたわけぢやないよ。」  
「これ。そんなに大きな聲を……」



蝸牛は慌てて眼でとめました。そして聲をひそめて、この頃世間の噂によると、人間は雨蛙が道風を感化して、すぐれた書家をつくり上げた手柄を記念するために、今度銅像を建てようと目論んでゐるといふ事を話しました。「そんな場合ぢやないか。話が違つてゐるなどと、餘計な口をきくものぢやないよ。」

銅像——と聞くだけでも、雨蛙は喜びました。彼は秋になると、鋭い嘴をもつた鶇トビがやつて来て、自分たちを生捕りにして、樹の枝に磔はりつけにするのを何よりも恐れてゐました。あの痼癢くよくよもちの小鳥が、赤銅張りの自分をどうにもあつかひかねてゐる姿を想像するのは、雨蛙にとつてこの上もない満足でした。

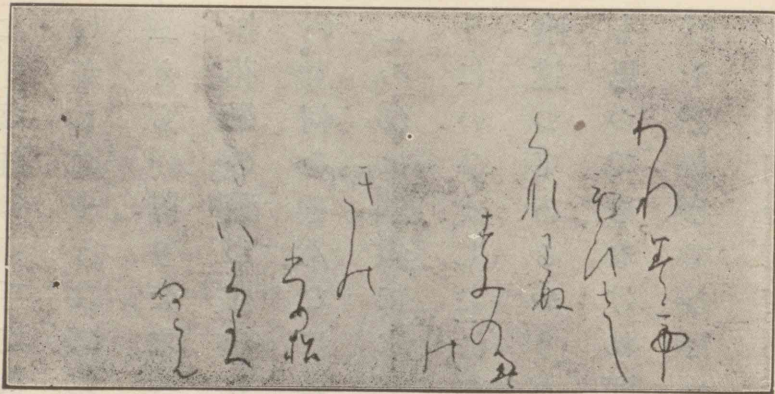
「だが、私は着物を着てゐない。すつ裸だ。こんな姿でもいゝのか知ら。」

雨蛙は心のなかでさう思ふと、急に自分の姿が恥づかしくなつて両手をひろげてふくれた腹を隠しました。腹には臍へそがありませんでした。

「私には臍へそがない。困つたなあ。臍へそのない銅像を見ると、皆が噴出すだらうからな。」

雨はざあざあ降りしきつて來まし

傳道風筆蹟  
われみてもひき  
しくなりぬすみ  
のえのきしのひ  
めまついくよへ  
ぬらん



一〇 道風の見た雨蛙

た。雨蛙は両手で腹を抱へたまゝ、ぶ濡れになつて腑<sup>ウツ</sup>抜  
けがしたやうにぼんやりとそこに立つてゐました。

「えらい降りだな。」蝸牛はどうかすると、滑り落ちさうな  
無花果の葉つばをしつかりとつかまへました。「おい。お  
い。何をそんなに考へ込んでるんだ。」

「おれは銅像になぞしてもらひたくない。」雨蛙は哀しさ  
うにいひました。「私の腹には臍がないし、それに話が十分  
喰違つてゐるやうだ。私はあの折人にものを教へようと  
も思つてゐなければ、そんなに骨を折つて柳の枝に飛びつ  
かうともしてゐたわけぢやないんだよ。」  
「ぢや、何をしてゐたんだ。正直に言ひなさい。」

蝸牛は険しい顔をしました。友達のそんな氣色を見て  
とつた雨蛙は、氣おくれがしたやうに聲を低めました。  
「ほんたうのことをいふと、私はぶらんこをしてゐたんだ  
よ。道風さんにはすまないけれど、唯それだけのことなん  
だ。」

「ぶらんこ……」

蝸牛は呆氣にとられたやうにいひました。そして柄の  
ついた雨除け眼鏡を持ちなほして、しげしげと相手の顔を  
見入つてゐましたが、こんなせち辛い世のなかに、のん氣に  
ぶらんこをして遊ぶやうな、そんな友達なぞ持ちたくない  
といつたやうに、顔をしかめたまゝ、黙つて向をかへました。

仲のいゝ友達を一人失くした哀しみを抱きながら、雨蛙はぐしよ濡れになつて、無花果の上葉から下葉へと飛下りました。

そこには皺くちやな蟊蛙がゐて、待つてゐたやうに悪態を吐きました。

「慾のない小倅めが。一家一族の面目といふことを知らないのか。」

「それは知つてゐる。だが、私は嘘は言ひたくないのだ。それに買ひかぶられるのが何よりも嫌なんだ。」

さういつた雨蛙の言葉には、何となく或明るさと力強さがありました。

(艸木蟲魚)

艸木蟲魚

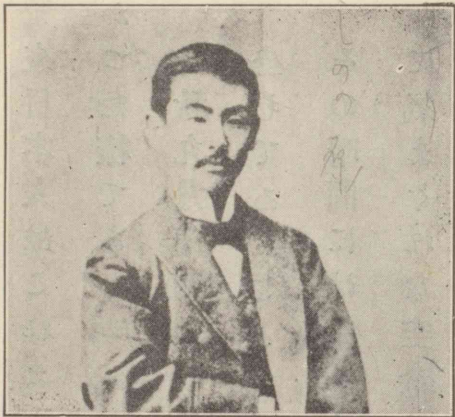
「道風の見た蛙」三七六頁—三八七頁。昭和四年一月、創元社發行。

國木田獨歩

名は哲夫、下總國銚子に生る。小説家。明治四十一年歿、年三十八。

一一 武藏野

國木田獨歩



昔の武藏野は萱原のはてなき光景を以て絶類の美を鳴らしてゐたやうに言傳へてあるが、今の武藏野は林である。

林は實に今の武藏野の特色といつてもよい。すなはち木は主に檜の類で、冬は悉く落葉し、春は滴るばかりの新緑萌出づるその變化が、秩父嶺以東十數里の野一齊に行はれて、春夏秋冬を通じ、霞に、雨に、月に、風に、霧に、時雨に、雪に、緑蔭に、紅葉に、様々の光景を呈する。その

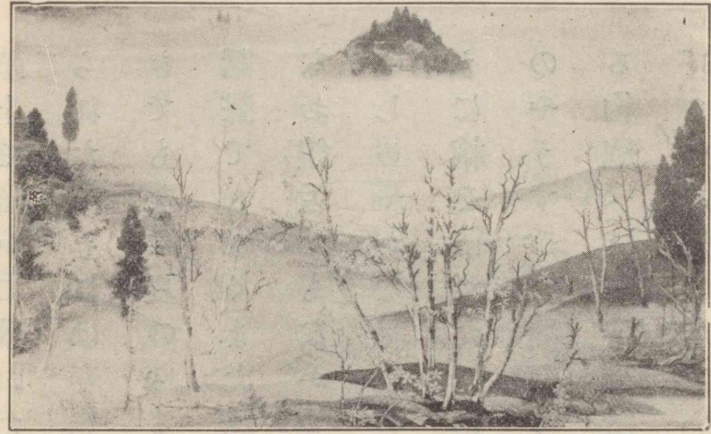
妙は一寸西國地方、又東北の者には解しかねるのである。元來日本人はこれまで楡の類の落葉林の美を餘り知らなかつた様である。

「秋九月中旬といふころ、一日自分がさる樺の林の中に坐してゐたことがあつた。今朝から小雨が降りそゞぎ、その晴間にはをり／＼生暖かな日かげも射して、まことに氣まぐれな空合ひ。あは／＼しい白雲が空一面にたなびくかと思ふと、ふとまた、あちこち瞬く間雲切がして、無理に押分けたやうな雲間から、澄んで、伶俐しげに見える人の眼の如くに、朗かに晴れた蒼空がのぞかれた。自分坐して、四顧して、そして耳を傾けてゐた。木の葉が

頭上で幽かに戦いだか、その音を聞いた許でも季節は知られた。それは春先する、面白さうな笑ふやうなさざめきでもなく、夏のゆるやかなそよぎでもなく、長たらしい話聲でもなく、また秋の末のおどおどしたうそさむさうなお饒舌でもなかつたが、只漸く聞取れるか聞取れぬ程のしめやかな私語の聲であつた。そよ吹く風は忍ぶやうに梢を傳つた。照ると曇るとで雨にじめつく林の中のやうすが絶間なく移り變つた。或はそこに在りたる物總べて一時に微笑したやうに、隈なくあかみわたつて、さのみ繁くもない樺のほそぼそとした幹は、思ひがけずも白絹めく優しい光澤を帯び、地上に散布いた細かな

ク  
Paportnik  
露語、蕨の  
類。

武藏野



落葉は、俄に目に映じてまばゆきまでに金色を放ち、頭をかきむしつたやうなバアポルトニクの見事な莖、しかも熟れ過ぎた葡萄めく色を帯びたのが、際限もなくもつれつからみつして目前に透かして見られた。  
或はまた四邊一面俄に薄暗くなりだして、また、く間に物のあいりも見えなくなり、樺の木立も、降積つた儘でまだ日の目に逢はぬ雪のやうに、白くおぼろに霞む——と、小雨

ツルゲネーフ  
Turgenieff  
ロシヤの小説家。西曆一八一八—一八八三

長谷川二葉亭  
本名辰之助、江戸に生る。小説家、翻譯家。ロシヤ語に精通す。明治四十二年歿、年四十六。

が忍びやかに、怪しげに、私語するうちにばらばらと降つて通つた。樺の木の葉は著しく光澤が褪めても、流石に尙青かつた。が、只そちこちに立つ稚木のみは總べて赤くも黄いろくも色づいて、をり／＼日の光が、今は雨に濡れたばかりの細枝の繁みを漏れて、滑りながらに脱けて來るのをあびては、きら／＼ときらめいた。

これはツルゲネーフの書いた物を、長谷川二葉亭が譯した短篇の冒頭にある一節であつて、自分がかゝる落葉林の趣を解するに至つたのは、この微妙な叙景の筆の力が多い。これはロシヤの景で、而も林は樺の木で、武藏野の林は檜の木植物帯からいふと甚だ異なつて居るが、落葉林の野は同

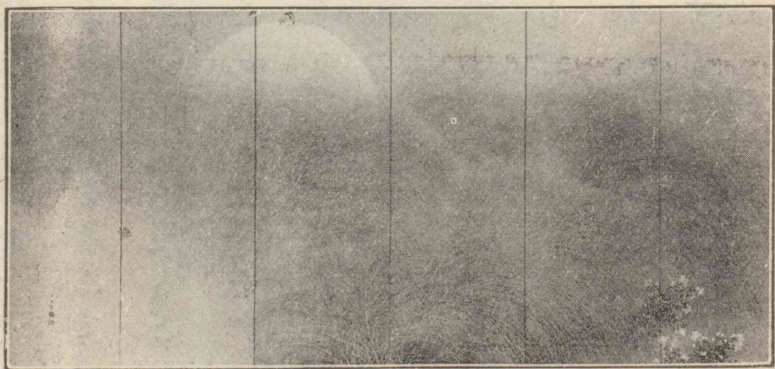
じ事である。

檜の類だから黄葉する。黄葉するから落葉する。時雨が私語く。風が叫ぶ。一陣の風が小高い丘を襲へば、幾千萬の木、葉が高く大空に舞つて、小鳥の群かの如く遠く飛去る。木の葉が落盡くせば、數十里の方域に互る林が一時に裸體になつて、蒼ずんだ冬の空が高くこの上に垂れ、武藏野一面が一種の沈靜に入る。空氣が一段澄みわたる。遠い物音が鮮かに聞える。自分は十月二十六日の記に、「林の奥に坐して四顧し、傾聽し、睇視し、默想する。」と書いた。この耳を傾けて聴くといふことが、どんなに秋の末から冬へかけての、今の武藏野の心に適つてゐるだらう。秋ならば

林の中より起る音。冬ならば林の彼方遠く響く音。

鳥の羽音。囀る聲。風の戦ぐ、鳴る、うそぶく、叫ぶ聲。叢の蔭、林の奥にすたく虫の音。空車、荷車の林を廻り、坂を下り、野路を横ぎる響。蹄で落葉を蹴散らす音、これは騎兵演習の斥候かさなくば夫婦連れで遠乗に出かけた外國人である。何事をか聲高に話しながらゆく村の者のだみ聲、それも何時しか遠ざかりゆく。獨り淋しさうに道を急ぐ女の足音。遠

武藏野の秋



く響く砲聲。隣のエでだしぬけに起る銃音。自分が一度犬をつれて近所の林を訪ひ、切株に腰をかけて書を讀んで居ると、突然林の奥で物の落ちたやうな音がした。足もとに臥て居た犬が耳を立てて屹度その方を見詰めた。それきりであつた。多分栗が落ちたのであらう、武藏野には栗の木も随分多いから。若しそれ時雨の音に至つてはこれほど幽寂なものはない。山家の時雨は我が國でも和歌の題にまでなつてゐるが、廣い／＼野末から野末へと林を越え、杜を越え、田を横ぎり、また林を越えて、しのびやかに通り行く時雨の音の如何にも靜かで、また鷹揚な趣があつて、優しく、懐しいのは、實に武藏野の時雨の特色であらう。自分

冬枯の武藏野

は嘗て北海道の深林の時雨に逢つた事がある。それは又人跡絶無の大森林であるから、その趣は更に深いが、その代り、武藏野の時雨の更に人懐しく、私語くが如き趣はない。

秋の中ごろから冬の初、

試みに中野あたり、或は澁

谷・世田ヶ谷、又は小金井の

奥の林を訪うて、暫く坐つ

て散歩の疲を休めて見よ。

此等の物音、忽ち起り、忽ち

止み、次第に近づき、次第に遠ざかり、頭上の木の葉、風なきに

落ちて、微かに音し、それも止んだ時、自然の靜肅を感じ、永遠



の呼吸身に迫るを覺えるであらう。武藏野の冬の夜更けて星斗闌干たる時、星をも吹落しさうな野分が、すさまじく林をわたる音を、自分は屢日記に書いた。風の音は人の思を遠くに誘ふ。自分はこの物凄風風の音の忽ち近く忽ち遠きを聞いては、遠い昔からの武藏野の生活を思ひつづけた事もある。

熊谷直好の和歌に、

よもすがら木の葉かたよる音きけば  
しのびに風のかよふなりけり  
といふのがあるが、自分は山家の生活を知つて居ながら、この歌の心をげにもと感じたのは、實に武藏野の冬の村居の時であつた。

熊谷直好  
周防の人。國學者、歌人。文久二年歿、年八十。

日光  
栃木縣日光町。東照宮のある所。鷲谷湖畔紅葉美麗なり。  
碓氷  
信濃・上野二國に跨る峻嶺。この峠往昔關所を置きたり。紅葉の名所。

林に坐つて居て日の光の最も美しさを感じるのは、春の末より夏の初であるが、それは今こゝに書くべきでない。その次は黄葉の季節である。半ばは黄いろく、半ばは緑な林の中を歩いて居ると澄渡つた大空が梢々の隙間から覗かれて、日の光は風に動く葉末々に碎け、その美しさ言盡くされず。日光とか、碓氷とか、天下の名所は兎も角、武藏野の様な廣い平原の林が隈なく染まつて、日の西に傾くと共に一面の火花を放つといふも、特異の美觀ではあるまいか。若し高きに登つて一目にこの大觀を占めることが出来るならこの上もないこと、よしそれが出來難いにせよ、平



女子國文大綱 卷四

獨歩全集  
 「武藏野」一〇七  
 六頁一〇八〇  
 頁。大正九年十  
 二月、博文館發  
 行。

九條武子  
 京都西本願寺に  
 生る。九條良致  
 男爵夫人。宗教  
 家、歌人。昭和  
 三年歿、年四十  
 二。

摩耶夫人  
 釋尊の母。  
 ルンビニー園  
 釋尊の誕生地。

九條武子

原の景の單調なるだけに、人をしてその一部を見て全部の  
 廣い殆ど限ない光景を想像させるものである。(獨歩全集)

二二 小品三章

おん母摩耶

九條武子



おん母マヤ夫人は、好んで  
 ルンビニー園に遊んだ。園に  
 は、無憂樹の花が一面に咲満ち  
 てゐた。おん母は、正眞にして  
 清涼なこの花を、心から愛して  
 居られた。

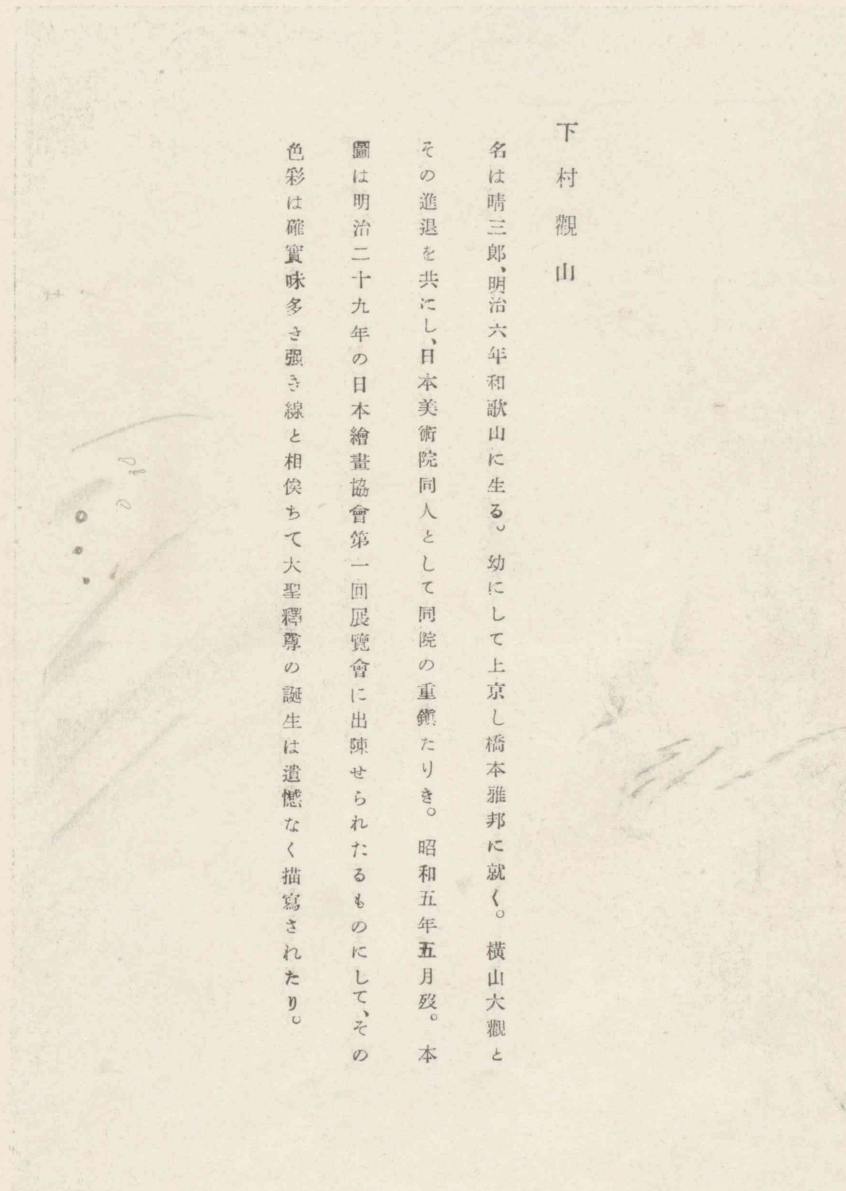
佛誕 下村觀山筆



(二二 小品三章)

下村 觀 山

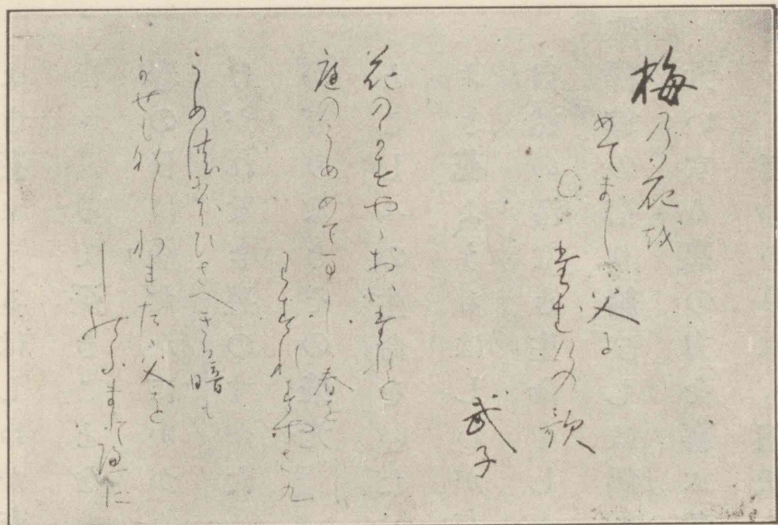
名は晴三郎、明治六年和歌山に生る。幼にして上京し橋本雅邦に就く。横山大觀とその進退を共にし、日本美術院同人として同院の重鎮たりき。昭和五年五月歿。本圖は明治二十九年の日本繪畫協會第一回展覽會に出陳せられたるものにして、その色彩は確實味多き強き線と相俟ちて大聖釋尊の誕生は遺憾なく描寫されたり。



よき花よ、うるはしわが友  
ほゝゑみて憂きことをしらず  
春の日はゆたかにかがよふ  
けがれなき恵のすがた  
かぎりなきその榮光  
とこしへの生命をいだけばおとろへもなし  
よき花よ、うるはしわが友  
自然の汚なき生命を、しみじみと慈しまれたおん母に、大  
聖釋尊の宿り給ひしは、偶然のことではない。  
大いなる恵の力を喜ぶ者こそ素純な花の心にもふれ得  
よう。無心の草木も慈悲の心をもつてふれる時憂なき心

九條武子筆蹟

梅の花をめでま  
し、父にたむけ  
の歌 武子  
花のかずや、お  
いたれど庭のう  
めめでまし、春  
をおすれずや  
く  
うめのにほひさ  
へぎる暗もみせ  
もなしわれただ  
父をしのぶまど  
べに



の華がひらく。

眠に入るとき

その日の仕事を終へて、眠に  
就かうとするとき、靜かに一日  
中の自分を回想して見る。一  
日の營みに疲れた自分を、もう  
一度呼返してみる。それは、涙  
ぐましい程懐しいものである。  
何の思ひわづらふこともな  
く、眠に就くときは嬉しい。快  
き回想の裡にもともすれば、暗

い影にをの、く自分を見出すときは、かぎりなき寂しさに  
襲はれずには居られない。

自分をしみじみと省みることは、度ましく生きる合掌で  
ある。私たちは、絶えざる懺悔を通して、丹念に生活して行  
きたい。そして何の憂もなく、平安な眠に入りたいと思ふ。

春まつころ

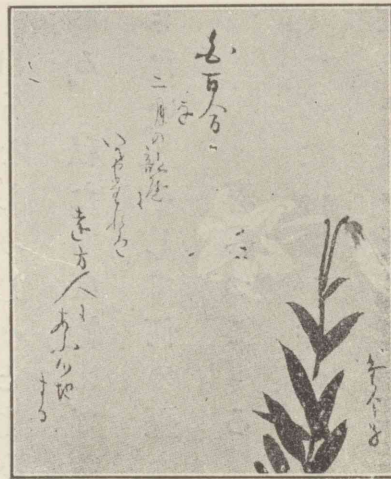
つめたい風が、幹のみの木立の合間から、枯野の原をはる  
ばると吹きまくる。灰色のにぶい日ざしのもとに、慌しく  
飛ぶちぎれ雲の如く、よるべなき身も世もまた、來らむ春の  
おとづれを信じて、ひたすらに度ましき沈黙をまもりつづ  
けてゐる。輝かしき光のもとに、やがて解放せらるべき日

を信ずればこそ、寂しき冬ごもりの中にも一縷のあこがれ  
がいだかれる。暗い冬の日も、晴れやかな春の日も、こゝろ  
すなほに恵の力を信ずるもののみが、平安なこゝろの悦に

満たされるのであつた。

遠い山の彼方に耕す翁——翁

はただ黙々と同じ仕事をつづけるのであつた。いつしか冬は去り、いつしか春が来る。おのづからなる恩恵のなかに生きる翁は、自らの辛勞を誇らうともしない。ただ子孫の産業のため  
に勢一杯の力を惜しまずして、耕すのみである。まごころ



武子自畫自替

をもつて恵を育くむ者程、自らの營みをおろそかに取扱は  
うとはしない。恵のまゝに働くことの喜は、恵を信ずる者  
のみが味はふ、度まじき法悦である。

掘返しても掘返しても盡きることのない大地の恵を翁  
は心から感謝された。同じやうに耕し、同じやうに土に歸  
つていつた。先祖以來たましひのこもつてゐるなつかし  
い土にたつて、翁は自ら耕し、やがてまた自分も歸つてゆく  
ことを思ふとき、うち下す一畝々々は、久遠の生命にふれ合  
ふ嚴肅な響とも聞え、又なつかしき語らひの聲とも聞える。  
變化なき耕作の生活にも自らの生命をきざんでゆく、眞劍  
なすがたがそこに見出される。

無憂華  
昭和二年七月、  
實業之日本社發  
行。

芳賀矢一  
福井市に生る。  
國文學者、文學  
博士、東京帝國  
大學名譽教授、  
國學院大學長。  
昭和二年歿、年  
六十一。



一三 本居翁の遺蹟

芳賀、矢一

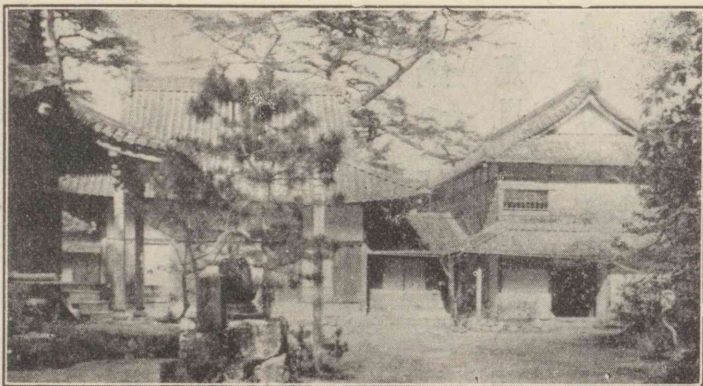


薄寒い朝風に面を吹かせて、野山の景色を眺めゆく楽しさ。早稲田はすでに刈盡くしたが、晩稲田は金色に波立って、豊年の喜を見せて居る。一里以上の路を往復するらしい一年生くらゐな小兒の連立つて行くのも、勇ましく心地よげに見える。尾花や野菊の交つて居る疎らな小松原の道を通つて、やがて、喬松の亭々と聳えた山の麓を過ぎる。「あの山は何。この山は何。お墓は

芳賀矢一

山室  
三重縣飯南郡花岡村の大字。

山室  
妙樂寺



あそこの向ふの茂みの所です。」と車夫の語るのを聞きながら、いつしか山室に着いた。車を捨てて爪先上りの坂道を上つて行く。繁つた木の間を流れる溪流の音、都に慣れた目や耳には清らかに珍しい。杉・松・椎などで小暗い路を稍四五町も上つた所に、浄土宗の寺がある。妙樂寺といつて、翁には深い關係のある寺である。それから右へ左への九十九折を喘ぎ喘ぎ六七町も上ると、古い木の鳥居があつて、十數段の石磴の上、二三十坪くらゐが平地

一三 本居翁の遺蹟

平田篤胤  
羽後國秋田の  
人、宣長歿後の  
門人。國學者。  
天保十四年(二  
五〇三)歿、年  
六十八。

になつて居る。その中央の小高い盛土が即ち翁の墓であ  
る。上に櫻の木が一本。「本居宣長之奥墓」と題した墓石が  
ある。山室山神社といふが、社殿も何もない。翁の墓の左  
手に圓い石があつて、平田篤胤大人の墓の石の  
なきがらはいづくの土になりぬとも  
魂はおきなのもとに行かなん  
と鐫つたのが立つて居る。篤胤大人の墓の石の  
篤胤大人は翁の歿後の門人で、生前に教を受けられたこ  
とはない。しかも數多の門弟子の中で、ひとり翁の傍に侍  
つて居られるのは、さぞかし満足なことであらうと思ふ。  
この墓所はかの妙樂寺の持地面であつたのを、翁が懇請し

て、生前に占定して置かれたのである。その承諾を喜んで  
住僧に宛てられた手紙は、今なほ同寺で珍藏して居る。

山室の山に千年のやどしめて

かぜに知られぬ花をこそ見ぬ

と詠まれたのはこの時である。二十年來、一日として翁  
の書物を讀まぬことのない後進の一書生が、今始めて翁の  
墓前に額づいて、感慨は眞に無量であつた。

百年の世は隔つれど教へ子に

かずまへませとをがみ額づく

翁が歿後の門人は幾百萬の多きに上つてゐるであらう。  
その著書の卓絶な學術上の價值と、偉大な感化力とは未來

とかいふやう  
負百十

永劫永くに歿後の門人を作りつゝあるのである。世に學者の事業ほど偉大なものはない。



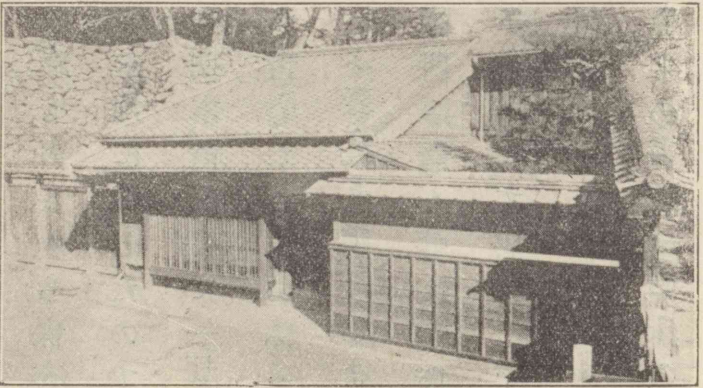
本居宣長像

を眼前に見る。「富士の山もいつもはちやうどあのあたりに見える。」とホテルの主人は指さした。千古に卓絶した偉大な學者の奥墓ほかもととしては、誠にふさはしい場所である。

Hotel ホテル

檀越 徒 那

本居翁舊宅



妙樂寺に入つて一憩し、翁の書幅を拜し、參拜名簿に記入

一三 本居翁の遺蹟

などする。こゝの眺望も誠に美しい。元來、翁の祖先の檀那寺で、翁はをりをりこゝに遊ばれたのである。

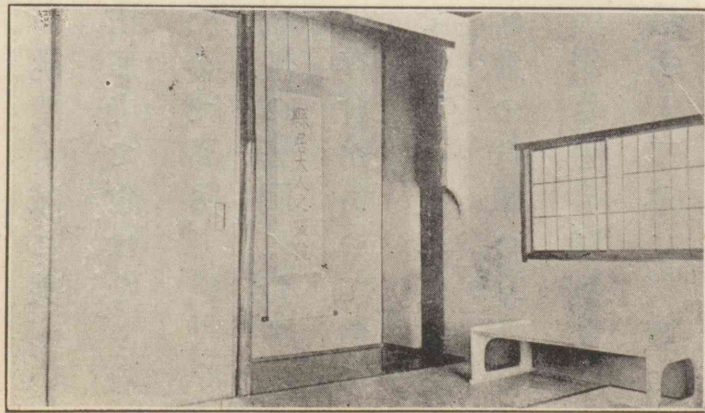
松坂へ歸つて、城址の公園に行く。こゝに鈴屋遺蹟保存會があつて、翁の舊宅がそのまゝで保存せられて居る。又新しい倉庫には翁の自筆の草稿遺愛の物、醫業用の藥箱なども陳列せられて居る。どの稿本本の下りも丁寧ていねいに綺麗に

のあり、まがいの稿本も丁寧  
にされ、紙に書いてある  
して、紙にエラれる  
四十年前のものを  
取り

本居清造  
今の戸主。翁五  
世の孫。

宣長の書齋

しめるに足る。舊宅はもと魚町にあつたのを、市中で火災の虞もあるから、保存會でこの舊城址の一角に移したのである。しかし庭の樹木、置石まで、一切舊態を存するやう苦心したといふことで、本居清造といふ表札まで、そのまゝになつて居る。臺所の竈も、井も便所も、舊のまゝの形が残されて居る。下が抽斗になつて居る小さな階子段を上ると、二階が四疊半の書齋、その床の柱に三十六の鈴が六つづつ六段につながれて懸つて居る。(これは模造品



ワイマール  
ドイツの  
都會。  
Weimar  
ゲート  
ドイツの詩  
人。西曆一  
七四九—  
八三二)  
Goethe  
シルレル  
Schiller  
ドイツの劇  
詩人。西曆  
一七五五—  
一八〇五)

で、本品は陳列庫に在る。これが即ち翁が一切の著書の述作せられた場所で、この四疊半から日本全國を吹靡かす風が舞起つたのである。西向の窓から差しこむ夕日は、さぞ堪へ難かつたらうと思はれて、この質素な家居の様が、愈々翁の人格を大ならしめる。ドイツのワイマールで、ゲートやシルレルの舊宅を見た時にも、その偉大な事業と、その質朴な家居の状態の對比を面白く感じたが、この鈴屋の遺蹟には、一層感を深うした。ゲート・シルレルの舊宅を見た時は日本にもかういふやうに、偉人の遺蹟を保存したいものだと思つたが、今やそれが實行せられて、まづこれを翁の舊宅に見ることを得たのは、誠に悦ばしいことである。



この松坂の公園は四望豁然、パノラマを見るやうで絶景であるが、翁の遺蹟を移して、更に崇高な威嚴を加へた。我が國に翁あるは、我が國の誇、松坂町民の誇は、翁の遺蹟に越したものはない。城の大手門を出でて數十歩、縣社山室山神社がある。社殿瑞籬が神宮風の様式であるのは「入うれしく感じた。小春日和の麗かさに、このあたりの櫻の木が幾本ともなく返り咲をして居る。宿の主人の話に、先年東郷大將の來られた時も返り咲を見られて、「さすがに本居翁の郷土ゆゑ、櫻は一年中咲くのだらう。」といはれたといふことである。

風知らぬ花にはありける。

(筆のまに)

附 古事記傳の版下

下村 宏

宣長が古事記傳に筆をそめたのは明和元年で、全部脱稿したのは寛政十年、この間實に三十五年の長きに亙つてゐる。古事記傳四十四卷三千三丁の版下は、春庭十七卷、美濃子五卷、翁六卷、土満一卷、有信五卷、丹羽昴十卷の數人の手になり、出版にかゝつたのは天明六七年、全部八帙の完成したのは文政五年で、この間また三十五年に亙つてゐる。即ち文政五年は宣長および出版のことを始めた千秋の歿後二十二年、彫刻のことに當つた有信の歿後十年、出

一三 本居翁の遺蹟

筆のまに  
二六〇頁—二六六頁。大正四年五月、富山房發行。

下村宏  
海南と號す。明治三十一年東京帝國大學法科出身。大阪朝日新聞社員。法學博士。

春庭  
本居春庭、宣長の長子、中年失明す。文政十一年(二四八八)歿、年六十六。

美濃子  
宣長の二女、兄春庭失明後その代筆をなす。

土満  
栗田土満、遠江の人、文化八年(二四七)歿、年七十五。

有 信

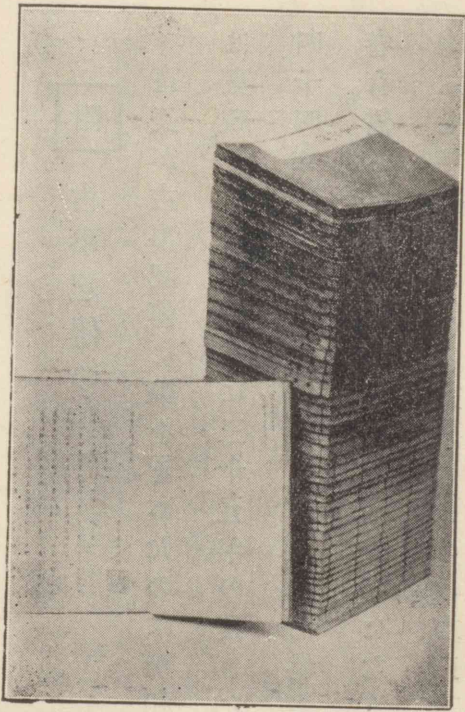
植松有信、尾張の人、文化十年(二四七三)歿、年六十。

丹羽 島

尾張の書家、天保十二年(二五〇一)歿、年六十九。

古事記傳原本

版書肆片野東四郎直郷の歿後二十八年の星霜を經過した事になつてゐる。



古人著作の苦心は誠に想像に餘りありで、この古事記傳の如きも容易に刊行の運びに至らず、門人尾藩の家老横井千秋の物質上の保護とその口入で名古屋の書肆永樂堂と風月堂が濫

四番茶  
一八頁—一九頁。昭和二年二月、博文館發行。

(四番茶)

一四 ことばの變遷

佐々 政一

佐々政一  
號は醒雪。國文學者、文學博士。東京高等師範學校教授。大正六年歿、年四十六。

不思議なものはことばの變遷である。日本語は幸にして二千年近い記録を有してゐて、世界で頗る古い言語の一つである。しかも萬

竹取物語  
我が國最初の小説。竹の中より出でたる赫夜姫を中心としたる物語。  
伊勢物語  
平安朝の物語、在原業平の歌に伴ふ説話を主としたるもの。



世一系の帝室を戴いた同一民族の間のみ發達したので、今から約一千年前に出来たといはれる竹取物語や伊勢物語を見て

も、半分以上は、今日も平常使用してゐる言語で出来てゐる。しかしながら、こんな國は、いふまでもなく世界中に又とはないのである。一千年前即ち十世紀前といへば、今の歐洲列強などは皆全くの野蠻國であつた。

日本語はかく久しい時代を経てゐるから、同じ語でもその意味は頗る變化したものが多し。例へば、「いへ」といふ語などはその一例であらう。昔は「いへ」といふと家族とか家庭とかいふことで、随つて「いへあるじ」といへば、一家族中の主長で、すなはち戸主のことであつた。然るに今日家といふと、家屋すなはち建築物のことで、「いへぬし」は貸家の持主の義に用ひられてゐる。

佐々醒雪筆蹟  
生海鼠々々汝成  
佛して何のほと  
醒雪

更に甚だしく變化してゐるのは、形容詞などに多い。たとへば平安朝の人々が「あはれなる人」といふと、大抵は美人のことである。我々が貧民や薄倖者を「あはれなる人」といふのとは、雲泥の違ではないか。「かなし」といふ語も、今日で



は悲哀の義にのみ使ふが、古へは極めて寵愛してゐる妻や子のことを「かなしき妹」とか、「かなしくする兒」とかいつた。かういふ變遷は、そんなに古い時代ばかりではない。漢語が頻りに用ひられ始めてからも、同様の變化は認められ

一四 ことばの變遷

爲朝

源爲義の八男。鎮西八郎と呼ぶ。幼時豪放大膽。父怒つて西國に逐ふ。保元の亂の際、皇方として奮戦す。後伊豆大島に流さる。

爲義

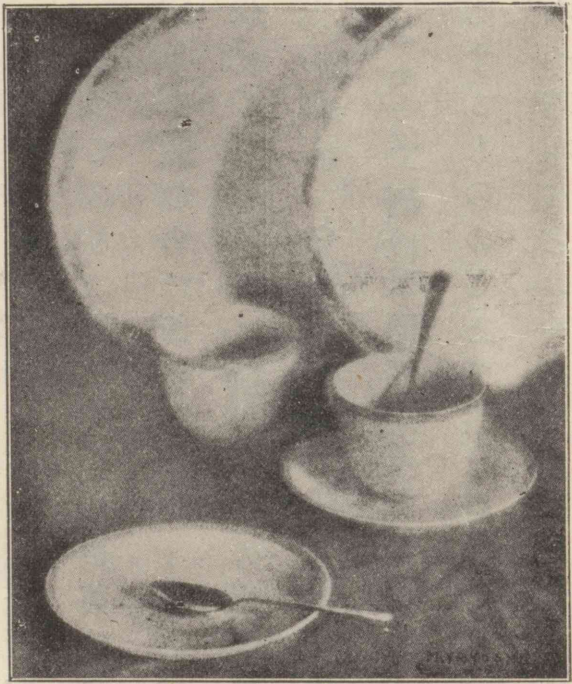
源爲義、保元の亂の際、崇徳上皇の召に應じて、白河殿を守り、取戦して斬らる。

る。例へば、「不用」といふ語は、今日では「入用でない」といふ事であるから、紙屑買が「御不用物はございせんか。」と呼んで来る。然るに中古では「不用なるもの」といふと、用ひるに堪へぬ「とんま」か「あはう」のことで、更に降つて武家時代に入ると、「爲朝が不用であつたから、父爲義が九州に追つた。」などと記してあつて、不用といふのは、「いたづら者」又は「無法者」の義である。鎌倉時代に、「不用なものとはございせんか。」と呼歩いたなら、「いたづら者はゐないかな。」と呼歩く鼠取薬の行商人と間違へられたであらう。

これらはまだ單なる變遷で、中にはその變遷の間に、語源の意義に對して奇怪な矛盾を生ずる事もある。漢方醫が

廢れて薬を煎じることがなくなつても、薬罐といふ名は残

陶磁器(寫眞)



つて居たり、その他不思議な言葉を列挙すれば際限もないが、就中奇態なのは「茶碗」や「さかな」である。

日本でまだ立派な陶磁器の出来ぬころ、支那から渡つて来た

上等の陶器は、専ら抹茶の席ばかりに用ひたから、これを茶碗といつたのである。然るに日本で硬い上等のものが澤

山出来るやうになると、御飯を食べるにも番茶を飲むにも陶磁器を用ひはじめた。そこで飯喰茶碗とか、茶飲茶碗とかいふ不思議な語が出来た。今日ではコーヒー茶碗とさへいつてゐる。茶を飲むのが茶碗なら、飯を食ふのやコーヒーを飲むのは、飯碗、コーヒー碗とでもいひさうなものだが、さう理窟通りに行かないのが言葉である。

「さかな」とは本來酒を飲む時に食ふものといふ語である。「さか」は「酒樽」「酒杯」の「さか」である。「な」は何でも副食物にするものことで、古は野菜類は勿論、皆「な」であるし、昆布や若布などのやうな食べられる海藻は、皆磯菜といつた。それから魚類は「な」の中の上等のものであるから、上等の

建築用材を「ま木」といひ、屋根を葺く上等の草を「ま草」といふやうに、これを「まな」と稱へた。今の「まな板」「まな箸」などいふ語は、これから來てゐる。然るに酒といふものは、上戸すなはち上等の家でなくては飲用しないし、且酒を飲む時は、今も昔も贅澤な副食物を求めることが普通であるので、自然魚類は酒席に多く供せられて、「さかな」といふ異名を得るやうになつた。

すでに魚類が「さかな」といふことに定つてしまふと、下戸が食へても、やはりこれを「酒な」といふのだから不思議だ。飯を食へてもやはり茶碗といふのと同じ類である。言語は又使つてゐる中に、段々下落するものである。た

とへば「大工」といふ語は工たくらすなはち工藝家中の俊秀しゅんしゅうなもの尊稱で、多くの小工どもの統領しやうりやうを呼ぶ名であつた。然るに今日では建物事業にたづさはるものは、小屋掛の叩き大工でもやはり大工である。かの棟梁むねりやう親方なども同様で、今日は一人の手下もなく子分もない男でも印半纏さへ着てゐれば、すなはち親方であり棟梁である。

最後に一つ、故意に轉訛せしめた例を示さう。言語の變遷は大抵自然のものであるが、江戸歌舞伎などには、故意こゝろに作つた人爲的の言葉がある。一時兵隊言葉といつて、一本橋いっぽんはしを獨木橋ひとりきといつたり、一軒屋いっけんやを獨立家屋といつたりしたこともあつたが、今ではそれも廢止されたやうだ。その他

には迷信から來た變造語へんぞうごも少々ある。たとへば海邊などに生えてゐる蘆あしといふ草を「悪し」と聞えるのを忌んで、わざと「よし」と呼びかへたり、四よを「死」と通ずるとして「よ」といつたり、梨なしを「ありの實」、硯箱えんばうを「あたり箱」、鯛たいを「あたりめ」といふ類が行はれてゐる。古へも伊勢の大神宮に御奉仕になる齋宮いはいみやの御所では、髪のない僧侶をわざと「髮長」といつた例もある。

要するに言語の不思議な現象は同一の語が例へば髮長といつて髪かみの無いことを表すやうに、正反對の意味にさへ用ひられるのであるから、その變化は蓋し窮極きゆうごくを知るべからずといふのが至當であらう。

(醒雪遺稿)

醒雪遺稿  
「ことばの話」五  
十頁—五七頁。  
大正七年十二月  
行。明治書院發

貝原益軒

名は篤信、筑前の人。江戸時代の儒者。正徳四年（一七二四）歿、年八十五。

一五 言語

貝原 益軒



一言は心の聲なりと、古人いへり。人の心の内にあること、言によりて外に出づ。一言みだりに發すれば、駟馬も追ひがたし。よき事もあしき事も、皆口より出づ。口を慎めば、過すなく、恥辱なく、禍なし。故に人の身の慎みは、口を慎むを第一の務とす。言多ければ、口の過多く、人に悪まれ、禍起る。慎みて多くいふべからず。殊に人を毀るは、莫大の悪事

貝原益軒像

なり。いましめて人の非をいふべからず。

一言をば必ず信にすべし。かりそめの少しなる事にも、偽るべからず。その事は少しなりとも、心を害する咎は大いなり。まことの道を失へばなり。故に萬の事うるはしくとも、偽をいふは人にあらず。わが心の神は則ち天地の神なり。畏るべし。心に偽と知らば言ふべからず。偽と知りてわが心をあざむくは罪深し。

一、人と約をなさば、必ずその信を堅く守るべし。一度約したる事をたがへば、人にあらずと思ふべし。若しその契約義にかなはざる事か、又力の及びがたき事にて、後に約を守りがたからんと思はば、かねて約をなすべからず。





然る故に譽むるも毀るも、輕々しく妄りにすべからず。

歲月を待つべし。即時に早く人

を譽め毀れば、必ずあやまりて、後

悔あり。われ人を悪しと思へど、

さもなくて却つて善きことあり。

善しと思へど、又悪しき人あり。

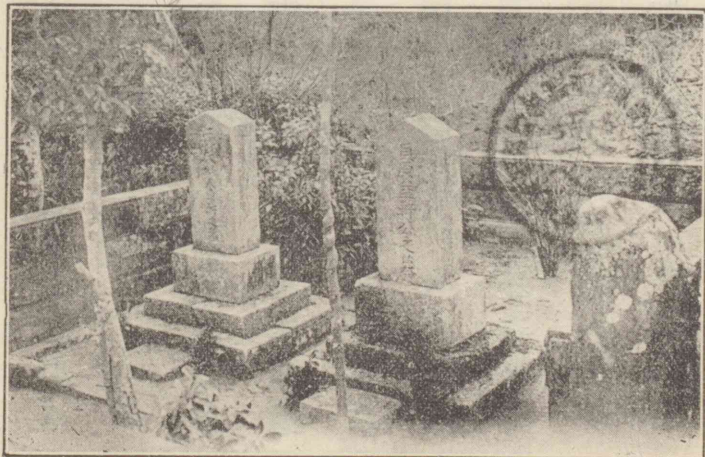
人のほめそしりも、妄りに信じ難

し。人の口と我が心を以て、善悪

を定むべからず、人の口わが口、二

つながら證としがたし。

一、面前に人をほむるは、諂にちかし。もし譽むべきことあ



貝原益軒の墓  
(福岡市)

らば、その人に對せずして、他人に對して譽むべし。その

人の感じもまた深し。面前に人の過を正すはよし。退

きて陰にてそしるべからず。

一、喜ぶ時の言は、誠少し。怒る時の言は、敬少し。喜び怒る

時、殊に言語を慎みて、喜怒のために、心をやぶらるゝ事な

かれ。

一、君子は人の善をあげて、人の悪を隠し、人の長ずる所をと

りて短なる所をゆるす。厚しといふべし。小人は、人の

善あるをば譽めずして、その過をあげてそしり、人の才の

長じたる所をばあげずして隠し、その才の不得手にして

短なる所をあらはしてそしる。薄きことの至りなり。

人の不得手なる所を言ひあらはせば、恨を取る。  
一人のいふ言をば聞入れずして、ただ我が道理のみをいひ  
たてんとするは、甚だ無禮なり。人にも道理をいはせて  
聞きて後、わが思ふところをのぶべし。  
一、止むことを得ずんば、人をそしり人を譽むることなくん  
ばあるべからず。されども妄りに好んで人をほめ毀り  
て、口には是非多き人は、古人のいましむるところなり。止  
むことを得ば、妄りに人をほめ毀るべからず。あやまる  
こと多し。

(大和俗訓)

大和俗訓  
益軒十訓の中大  
和俗訓卷五一言  
話。

菊池寛

明治二十二年高  
松市に生る。京  
都帝國大學文科  
出身。劇作家。

一六 形

菊池 寛

攝津半國の主であつた松山新介の侍大將中村新兵衛は、  
五畿内中國に聞えた大豪の士であつた。

その頃、畿内を分領して居た筒井・松永・荒木・和田・別所など  
大名・小名の手の者で、「槍中村」を知らぬ者は、恐らく一人も  
なかつただらう。それほど、新兵衛はその扱き出す三間柄  
の大神槍の鋒先で、魁け殿りの功名を重ねて居た。その上、  
彼の武者姿は戦場に於て、水際立つ華やかさを示して居た。  
火のやうな猩々緋の陣羽織を着て、唐冠・纓金の兜を被つた  
彼の姿は、敵味方の間に、輝くばかりのけさやかさを持つて

筒井 名は順慶。  
松永 名は久秀。  
荒木 名は村重。  
和田 名は惟政。  
別所 名は小三郎。

居た。

「あゝ、猩々、緋よ唐冠よ。」と、敵の雜兵は新兵衛の槍先を避けた。味方が崩れ立つた時、激浪の中に立つ巖のやうに敵



勢を支へて居る猩々緋の姿は、どれ程味方にとつて頼もしいものであつたか分らなかつた。又嵐のやうに敵陣に殺到するとき、その先登に輝いて居る唐冠の兜は敵にとつてどれほどの脅威であるか判らなかつた。

菊池 寛

かうして槍中村の猩々緋と唐冠の兜は、戦場の華であり、敵に對する脅威であり、味方にとつては信賴の的であつた。

「新兵衛どの、折入つてお願がある。」

と、元服してからまだ間もないらしい美男の士は、新兵衛の前に手を突いた。

「何事ぢや。そなたとわれらの間に、さやうな辭儀は入らぬぞ。望と云ふを、はやういうて見い。」

と、育くむやうな慈顔を以て、新兵衛は相手を見た。

その若い士は、新兵衛の主松山新介の側腹の子であつた。そして、幼少の頃から新兵衛が守役として、我が子のやうに慈しみ育てて來たのであつた。

「外の事でもおりない。明日はわれら初陣ぢやほどに、何ぞ華々しい手柄をして見たい。ついては、御身様の猩々緋と唐冠の兜を貸してたもらぬか。あの羽織と兜とを着て敵の眼を駭かして見たうござる。」

「は、念もない事ぢや。」

と新兵衛は高らかに笑つた。新兵衛は相手の子供らしい無邪氣な功名心を快く受入れることが出来た。

「が、申して置く、あの羽織や兜は、申さば中村新兵衛の形ぢやわ。そなたが、あの品々を身に着ける上からは、われらほどの肝魂を持たいでは叶はぬことぞ。」  
と、いひながら新兵衛は又高らかに笑つた。



生活の北月界を  
飲げる人藝は  
造る化に過ぎない  
菊池寛

そのあくる日、攝津平野の一角で、松山勢は大和の筒井順慶の兵と鎬を削つた。戦が始る前、いつものやうに猩々緋の武者が唐冠の兜を朝日に輝かしながら、敵勢を尻目にかけて、大きく輪乗をしたかと思ふと、駒の頭を立てなほして、一氣に敵陣に乗入つた。  
吹分けられるやうに、敵陣の一角が亂れた處を、猩々緋の武者は槍をつけたかと思ふと早くも三四人の端武者を突伏せて、又悠々と味方の陣へ引きかへした。

その日に限つて、黒革絨の鎧を着て、南蠻鐵の兜を被つて居た中村新兵衛は、會心の微笑を含みながら、猩々緋の武者の華々しい武者振を眺めて居た。そして自分の形だけすらこれほどの力を持つて居るといふことに、可なり大きい誇を感じて居た。

彼は二番槍は自分が合はさうと思つたので、駒を乗出すと一文字に敵陣に殺到した。

猩々緋の武者の前には、戦はずして浮足立つた敵陣が、中村新兵衛の前には、びくともしなかつた。その上に彼等は、猩々緋の「槍中村」に、突擾みたされた恨を、この黒革絨の武者の上に復讐フクシツせんとして、猛り立つて居た。

武者 傳小野通女筆



(一六形)

新兵衛は、何時もとは勝手が違つて居ることに気がついた。何時もは虎に向つて居る羊のやうな怖氣が敵に在つた。彼等がうろたへ血迷ふところを突伏せるのに、何の造作もなかつた。今日は、彼等は對等の戦をする時のやうに勇み立つて居た。どの雑兵も、どの雑兵も、十二分の力を新兵衛に對して發揮した。二三人突伏せることさへ容易ではなかつた。敵兵の槍の鋒先が、ともすれば身をかすつた。新兵衛は必死の力を振つた。いつもの二倍の力をさへ振つた。が、彼はともすれば突負けさうになつた。手輕に兇や猩々緋を貸したことを後悔するやうな感じが、頭の中をかすめた時であつた、敵の突出した槍は、緘の裏をかいて彼

極樂  
三頁。大正九年  
七月、春陽堂發  
行。

秋田雨雀  
名は徳三。明治  
十六年青森縣に  
生る。早稻田大  
學英文科出身。

の脾腹を貫いて居た。

(極樂)

一七 先生の墓

秋田 雨雀

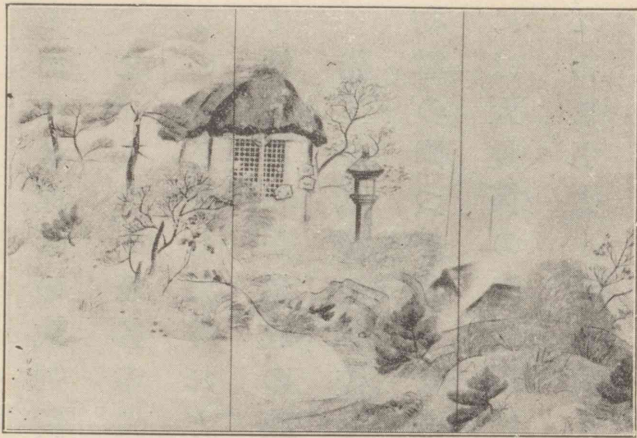
私達の大好きな先生のお墓は、町の外れの淋しい岡の上の墓地にあります。この墓地は、割合に新しく出来たところで、大きな樹は少い代りに、小さな形の良い灌木がこんもりと茂つて、墓地と墓地との間には、青い滑らかな苔が生えて、晴れた日は日光が赤々とその上を照すのでした。その墓地の片隅に、私達の大好きな先生が静かに眠つてゐるのです。

私はいつでも先生のお墓にお参りすると、先生について

いろ／＼な楽しいことや悲しいことが思ひ出されます。

私達の先生の名前は、大島良太郎といひました。背の高い瘦せた細面の人で、眼の光の大變に軟かな感じを與へる人でした。私達は今でも眼をつぶつて先生の事を考へると、先生の生きて居られた頃の動作や聲の調子までが、はつきり思ひ出されるほどです。

大島先生が最初に私達の學校へ來られたのは、私達が尋常科の三年の時でした。先生は私達の町から大分離れた或村で生れ



丘の薬師堂

一七 先生の墓

た人でした。ある人の話では、先生が師範學校へ入學される前には、或町の裁判所の給仕をしてゐられたのだといふことでした。そんなことは私達子供にとつては餘り用のないことでしたけれども、誰いふとなくさういふ噂がたつて、妙にそれが私達の興味をそゝるのでした。

先生が私達の學校へ來られたのは十一月の五日の日で、初雪の降つて間もない頃のことでした。學校のそこには、天長節の縁門ヱノカドに使つた黄色や白の菊の花が散らばつてゐました。大島先生はその日緋の着物を着て、玄關の所にぼつんと一人で立つて、私達が列を作つて階段を下りて來るのを眺めてゐました。

天長節  
明治天皇の天長  
節十一月三日

私達は、この先生がその翌日から私達の受持の先生になるといふことは、少しも知りませんでした。しかし私はこの先生を見た瞬間からなんとなく懐しいやうな氣持のしたことを覚えてゐます。翌日私達が控所に集つてゐると、大島先生は瘦せた身體をその戸口の處へ立てて、なんにもいはないで、名簿を二三度上へ持上げて私達を呼びました。それで、この先生は私達の受持の先生になつたのだといふことを知りました。

大島先生が私達の受持になつた最初の日のことを、今でも私は忘れません。大島先生は教壇に立つて、黙つて、生徒の顔を見てゐましたが、いきなり細い指で白墨を摘んで、黒



板の上に大きな圓を描きました。そして眞面目な顔をして、「これはなんですか。」と生徒に質ちねました。生徒はただ笑つてゐて、誰も手を挙げませんでした。すると、先生は順に自分の近い處に坐つてゐる生徒から質問をして行き  
ました。



或生徒は、「先生、圓です。」と答へました。また或生徒は、「先生、お日様です。」と答へました。また或生徒は、「先生、お月様です。」と答へました。また或生徒は、「先生、お團子です。」と答へました。

秋田雨雀

大島先生は十人ばかりの生徒に一々質問をしてから、靜かにいひました。

「さうです。あなた方の答はみんなほんたうです。人間は自分の考へてゐることに一番近いもので物を考へるものです。みんなの考はみんなほんたうです。」といつて、暫く生徒の顔を見てゐましたが、また白墨を摘んで、

「これは地球ですよ。」と書いて、それきり何もいはずに讀本の授業にかゝりました。

大島先生はあの時なぜあんなものを描いて、あんなことをいはれたのか、私には今でもよく解りません。併し、私は大島先生のことを考へると、どうしてもあの最初の言葉が

思ひ出されて仕方がありません。私達の大島先生に教はつたのはたつた一年でした。が、しかしこの一年の印象は私達にはどうしても忘れられないものでした。

大島先生といふ人は一體どんな人なのでせうか、今でもよく解りません。しかし、とにかく、大島先生は私達にはなんとなく忘れられない人でした。

大島先生は私達の受持をお止めになつてから高等科の二年生の受持になりました。高等科の受持になつてからは、同じ學校にゐても、私達はだんだん先生にお目にかゝる機會が少くなりました。或時學校のすぐ隣の神社の境内で、私達が遊んでゐるところへ、大島先生が散歩に來られた

ことがありました。その時はもう授業が終つて、夕方に近い頃でした。神社の境内に夕日が赤く射し込んでゐました。私達はいつでも先生を見れば縋るやうに、「先生、先生！」と呼んで、先生の方へ駈出して行きました。その時先生は私達の駈寄つて行くのを見ても、どういふわけか、いつものやうに喜んでくれませんでした。先生はただ淋しい笑ひ方をして、「みんなゐるね、何をして遊んでゐるの？」といつたきり、そのまゝ神社の境内を横切つて通り過ぎてしまひました。なぜでせう？私は子供心に大變物足りない心持がして、いつまでも先生の後姿を見送つてゐました。しかし私は子供らしく何事も忘れて過しました。また

秋が来て學校のお庭には、杉やアカシヤや楓の葉が吹飛ばされて来る頃になりました。びしょびしょしたぬかるみの路の上を、眞白な雪が一面に掩ふ冬が來ました。

その後、私は大島先生に學校で度々逢つたことはありませんが、大島先生の顔はだんだん暗く淋しくなるやうに思はれました。あの柔かな眼と眉毛の間には暗い陰影が出來て、細い眼の中から冷たい光が洩れて來るやうに思はれました。

その翌年の春、雪消の頃、私達の大好きな大島先生は私達の學校をやめて、東京へ行く事になりました。雪の消えかゝつた學校の庭に立つて、私達は大島先生と別れを告げまし

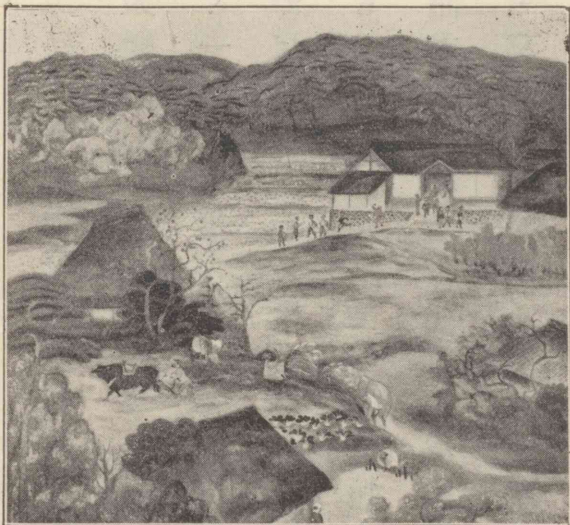
た。大島先生は玄關の石段の上に立つて、私達の方を見下してゐましたが、

「私は今日諸君にお別れを告げなければならぬことを大變悲しく思ひます。しかし、私は又今日から諸君と等しく一人の學生となることを大層愉快に思ひます。諸君はまだ幼い。……人生について知らないことだらけです。私も……また人間について知らないことだらけです。諸君に別れるのは、自分をもつとよく知りたいためです。……私は今、私の胸を開いて諸君に知らせたいことを澤山に持つてゐます。……しかし、それは私には出來ないことです。諸君は、諸君自身でその事の爲にお苦しみになるまでは、ど

うすることも出来ません。……とにかく長い間私の様な者を慕つて下さつた諸君に深くお禮を申し上げます。」

といつて、大島先生は石段を下りました。

それから三年目の夏の初めに、悲しい知らせが私達の耳に入りました。大島先生は東京の淋しい下宿屋の一室で、肺病で亡くなられたと言ふことです。間もなく大島先生は、小さな箱の中に灰になつて入れられて、私達の町へ運ばれて來ました。そして先



村の小學校

生の遺言によつて町の墓地へ葬られることになりました。私達の大好きな、大島先生のお墓は、この淋しい岡の上の墓地にあります。大島先生の墓は、墓地の片隅のポプラとアカシヤとプラタナスの蔭に靜かに横たはつてゐます。このお墓の出來た頃には、町の人は誰もこのお墓を顧みもしませんでした。それほど哀な見すばらしい墓でした。大島先生のお墓の反對の側の角の處には、町で一番幸福に暮した隠居さんのお墓がありました。この隠居さんは、一代の内に巨萬の富を蓄へた人であつたために、その墓石の立派なことはこの地方ではとても比較するものもないほどでした。隠居さんの親類に巧者な石屋があつて、選り

に選抜いた石を山から切出して、その石を大變風變りに刻みつけました。道行く人は、隱居さんの墓の前に立つて、合掌して自分もその幸福にあやかりたいと思ひました。しかし、大島先生のお墓には、一年たつても二年たつても、石碑が立ちませんでした。二坪ほどの大きさの墓地の眞中に、友達の書いた粗末な棒杭が立つて、その兩側に二本の常磐木が植つてゐるきりでした。大島先生の友達は、大抵貧乏な人達ばかりでしたから、それを悲しんでもどうすることも出来ませんでした。或時私は大島先生のお墓へお参りしたら、誰が持つて來たのか、殆ど圓い形の自然石が一つ、お墓の眞中にころがつて、その周圍に扁平へらびらたい石が三つ四つ

置いてありました。

私はそのまん圓い形の石を見てゐる中に、いつか大島先生が黑板へ描かれた圓形のことを思ひ出しました。やがて圓い自然石と扁平へらびらたい自然石との間に雑草が生ひ茂つて、大島先生の身體を軟かい毛皮で包んででもやらうといふ様に、墓地の上に生ひはびこつて來ました。草藪の赤い花や、薄の白い穂が、雑草の間から背伸びをしてこゝに私達の大好きなく、大島先生の眠つてゐることを告げてゐるやうに思はれます。

これが私の先生のお墓です。

相馬御風

名は昌治、明治十六年新潟縣西頸城郡糸魚川町に生る。早稻田大學文科出身。評論家、詩人。

一八 雜草

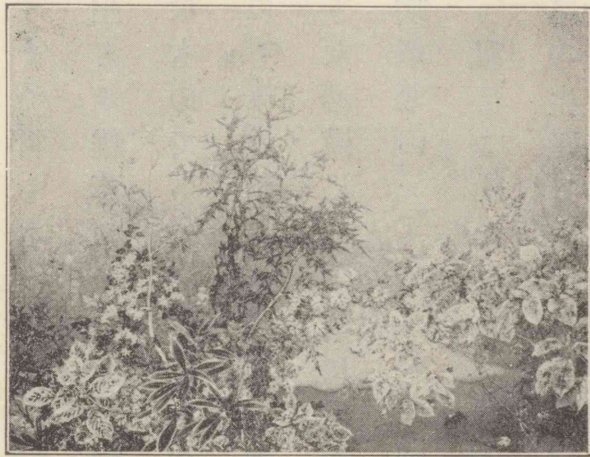
相馬 御風

少し油斷をすると、すぐ雜草が蔓る。畑から庭の隅々まで綺麗にして置かうといふには、絶間なき注意と努力が必要である。長い間積つてゐた雪が、やつとのことで解去つたかと思ふと、その跡には一面にもうあざやかな、みづみづしい色をした雜草が頭をのぞかしてゐる。土いちりに慣れない上につまらない小さな草でも、氣になりだすとたまらない私には、この雜草の處分は最も困難な、最も氣ぜはしい仕事の一つである。そこで時には、どうかして絶対に雜草の生えないやうにすることはできないものだらうかと

いふやうなことまで考へるのだが、しかし絶対に雜草の生えないといふやうな場所では、私どもに必要な植物もまたうまく育ちさうには思はれない。そればかりでなく、年々生える雜草のお蔭で、土の肥されつゝある功德は、また非常なものである。畑にとつては雜草は邪魔物であつて、同時にそれは大切な肥料である。一本の雜草すら育たないやうな沙漠には、同時に有用な植物も生えないし、美しい花も咲かない。

私はこんなやうなことを知つたり、考へたりして、年々雜草の生えるのをのろつたり、感謝したりしてゐる。そして時には、私達が自分等のために有用だとして大切につちか

ひはぐくみつゝあるところのもろくの植物の運命と、そ



の名もろくに知られず、満足に花一つ開くこともできないやうな雑草の運命とを思ひくらべて深い想に沈むことさへある。しかも雑草は絶えない。年々歳々少しも人間の力を借りる事なしに、いち早く萌出る、伸びる、ひろがる。徒に雑念を蔓らせてしまふと、

雑草

心は終に荒れはてるであらう。しかし雑念の發生の盛な時は、すなはち心の土の肥えてゐる時である。そしてそれは正によい種を蒔くべき時である。雑念の草は刈られて、やがてよい種を生育するための肥料となる。私達は私達のよい種を大切にしなければならぬことは勿論であるがそれと共にそれを養ひ、それを育てるための肥料となるべきものを輕んじてはならない。種がいくらよくても土が瘦せてゐてはだめである。雑草を耕地から除くことの必要は無論であるが、それを用ひて土を肥すことも同じく必要である。近年稻田にわざわざ蓮華草の種を蒔いて繁茂させ、それを更に肥料として役立たせることが、かなり盛行はれてゐるが、これなどは一層興味の多い事實である。

砂上漫筆  
「雑草」二三三頁  
一三五頁、大  
正十年五月、春  
陽堂發行。

樋口一葉

名は夏。東京の人。小説家。明治二十九年歿。年二十五。

一九

猫の子をもらひにやる文 樋口一葉

今日學校にて伺ひに馬手飼の三毛あまた子をつまひし。勝持かたらうき赤猫はあつりと仰せり。たは夫れはわがひも申し上げぬ。悉く白く尾と頭とにサー黒きまある男猫のみや。私寵愛の玉をば隣の犬に噛まけり。よりの来。あれに似かよひたる白きりのあらば望み居りしにのみあつ。馬話承りし。その猫のとも忘れがたき。赤のほかほけり。も馬つかはし。相めぐまきやう仰せらけり。

をうけく。ねつけながら。昔猫が居裁わがひにあつ。かならずおく。又車が夜も蒲団の上になつ。申すべく。うまさのたべせし。老海よきも。をお目に。かろ。やういたまふ。前に申したる。馬の犬は早くに行き方わからず。成りて。は心安きには。何を。何とぞ。は。り。は。け。は。か。り。極。ま。の。鯉。若。一。袋。親。猫。た。一。料。に。進。下。茶。を。せん。馬。わ。が。ひ。ま。が。か。り。こ。



同辺事

植口一茶

其所望<sup>ニモテ</sup>けけたまはる。只今表通の末屋よ  
 りに買ひたき由はて人まゐりかば何れ  
 にしむと答へたるに、一穂立歸り貰ひま  
 の娘と相談の上又あづべーとを門をく  
 りしに預きさらけしめ侍使いませー  
 屏かば止むを得ぬはありしときと  
 一回親を見合せ申しし。其丁寧のは違物親  
 猫いかにもうとびはん。其の聲も昨日  
 今日、所とく事を覺えんとて、床柱に  
 ぶすまにまれ、厭ひなくつき立てぬ。

さる方に  
 それはそれにて  
 御容赦を願ひた  
 しの意。

一葉全集  
 六一二頁―六一  
 三頁。大正十一  
 年六月、博文館  
 發行。

室生犀星  
 名は照道。外に  
 魚眠洞の號あ  
 り。詩人。明治  
 二十二年金澤市  
 に生る。

侍用心遣はされまじびくしつげ  
 相成度俄の事にて何の用意もなく首玉  
 の新しきも何も飾らせぬかなはねは  
 さら方に御見申す。實方<sup>かた</sup>わすけ  
 ればと輕りの給はるんやう願度おね  
 か三合りも是らね天<sup>あま</sup>本<sup>ほん</sup>夢<sup>ゆめ</sup>の粉一袋を  
 そへまゐらせぬ。或<sup>ある</sup>えーと、洗面<sup>せんめん</sup>  
 けしんりせぬか。

一葉全集

二〇 詩二篇

室生犀星

朝の歌

こどものやうな美しい氣がして  
 けさは朝はやく起きて出た。  
 日はうらくと若い木々のあたまに  
 すがすがしい光をみなぎらしてゐた。  
 こどもらは喜ばしい朝のうたをうたつてゐた。  
 その澄んだこゑは  
 おれの静かな心にしみ込んで來た。  
 何といふ美しい朝であらう。  
 何といふ幸福を豫感せられる朝であらう。

(現代日本文學全集)

現代日本文學全集

「第三十七卷」現代日本文學全集。室生犀星篇。三九六頁。昭和四年四月、改造社發行。

寒竹

寒竹のやさしい芽が茜いろに伸び  
 そのさきの方に二枚の新しい竹の葉がある。  
 小春日のあさい日に透いて  
 それはたぐひなく美しい。

冬の寒さにも劣らずによう伸びた寒竹、  
 さういふわたしは古い日本のならはしを  
 いつのまにか心にやどしてゐる。  
 庭を掃くをんなよ  
 その芽を折らしてはならぬ。

(高麗の花)

高麗の花

四二頁―四三頁。大正十三年九月、新潮社發行。

志賀直哉  
明治十六年宮城  
縣石巻町に生  
る。小説家。

奥カチ省、  
形式ヲ新レ  
方ヲ新レ  
自分相度

① 二 宿かり 曜日 志賀直哉

大きな榮螺さざえの殻に入つてゐる宿かりが、岩の上から下に  
澤山集つてゐるきしやごを見下して、「小さいな。」と思つ  
た。「相變らずうちうちしてゐるな。」と腹で冷笑した。彼  
は、以前自分がその殻の一つに入つて、仲間の様にして居た  
ことを憶ひ出して、自分ながらもよくこんなになんか大きくなつ  
たものだ味方と己惚れた。宿かりは勢よくきしやごを押分け  
て岩を駈下ると、一度中返りをしてどふんと海の中へ飛込  
んだ。わあといふきしやごどもの笑ひ囁す聲が聞えた。  
「馬鹿どもが。」かう思ひながら、彼は、大きなもののみが感じ

られる寛大な心持を味はひなが  
ら、海の底をのそくと歩いてゐ  
た。

彼は傍に何かごりごりと云ふ  
音を聞いた。見るとそれは、自分  
よりも大きな榮螺が、そろくと  
岩を這上つて行く處だつた。彼  
は急に堪らない恥づかしさを感じ  
じた。彼は榮螺に見つからない  
やうに、拔足差足其處を退いた。  
一人になると、彼は急にむかくと腹が立つて來た。さう



蟹の圖

三宿かり

して無理やり自分の殻を脱いでしまつた。

砂地を、今度はそろ／＼と臆病に這つて行つた。柔かい尻が砂で擦れて痛くてやりきれなかつた。彼は苦しんだ。一日一晚苦しんだ。そしてやりきれなくなつた時に、ちやうど其處に非常に大きな法螺貝のからを見出した。それは、昨日彼を脅かした榮螺よりも、更に／＼大きかつた。彼は靜かに尻の方からその中に潜り込んで、やつと安心した。その貝は重く、且彼の身體にはゆる／＼だつた。構はず苦しい思をして、それを曳きずつて歩いた。

彼はまた大きくならう／＼といふ慾望に燃立つた。一年ほど經つた。さうして彼は驚くべき發育で、その法螺貝

の中に一杯になるまで育つた。もうそれを曳きずつて歩くことは何の苦も無くなつた。彼は餘りにいら／＼しなくなつた。前ほどには大きくならうといふ慾望も燃立たなくなつた。

その時彼は偶然にもまた素敵に大きな法螺貝に出つた。彼は榮螺の殻に入つて居た時、大きな榮螺に出會つた時よりも、倍も自分を恥づかしく感じた。腹を立てるにしては、もう力が足らなくなつた。彼は全く自分に失望した。自分がどれ程大きくなるにしても、其處には何時も自分だけの大きさの貝殻がなければならぬと思つた。彼は全く絶望し

てしまつた。

彼はすぐさま自分の入つて居た法螺貝を捨ててしまつた。彼は又殻なしで痛さを我慢して、そろ／＼と大病人のやうに海底の砂地を這つて行つた。時々その傍を輕蔑するやうな横目遣をしながら、伊勢蝦がびんびんと勢よく跳ねて通つた。龍落子がげげんな顔をして立止つて彼を見送つてゐた。彼は愈、やりきれなくなつて來た。それでもまだ何か求めるやうに、海の底を一方へ／＼ずるずるとその柔かい腸の尻を曳きずつて歩いて行つた。路々彼が這入れるくらの大きな法螺貝の殻にも出會つた。併し彼は今更それに潜り込まうと云ふ氣はしなかつた。

彼は極端に憂鬱になつた。力も萎えて來た。彼はもう自分も死ななければならぬと思つた。なぜ自分の生涯の結果がこんなにならなければならなかつたらうと考へた。それよりも「何が只の宿かりで居られない慾望を、自分に與へたのだらう。さうしてそれは何の爲だらう。」と考へた。それは彼に何の幸福をも持來さなかつた。彼は常に満たされずに來たのだ。彼の精神も肉體も、段々に參つて來た。とう／＼動けなくなつた。さうして死んだ。そこに、ちやうど一さうの漁船が來た。宿かりの死骸が偶然その網にかゝつて引上げられた。漁夫たちはそれを見て驚いた。どうしてこんな大きな宿かりが出來たのだ

らう、世界中に恐らくこんな大きな宿かりはあるまいと、互にその手に入つたことを喜んだ。彼等はすぐ船を引返して、早速それをアルコール漬にした。さうしてそれを見せ物にしようと騒ぎ合つた。

罐の外から宿かりの柔かい尻の擦りむけた腸の出た處を頻りに眺めて居た一人が、「あんまり大きくなり過ぎて、もう這入る具がなくて死んだに相違ない。」といった。宿かりの體はアルコールでそろ／＼色が變つて來た。そして彼はまだ、死んだ時の絶望と苦悶とを顔に表して眼を眠つたまゝで居る。漁夫たちは、その表情は固より、宿かりの心理については何も知ることが出來なかつた。(白樺の森)

白樺の森

「小品五ツ」三六  
〇頁一三六五  
頁。大正七年三月  
新潮社發行。

二三二 笑話

けしからずものごと不意機に不意にに祝ふものありて、與三郎といふ中間に、大晦日の晚いひ教へけるは、「今宵は常より疾く宿に歸り休み、あすは早く起きて來り門をたゞけ。内より『たそや』といふ時、『福の神にて候』と答へよ。即ち戸をあけて呼入れん。」と懇に言ひふくめて後、亭主は心にかけて、鶏の鳴くと同じやうに起きて、門に待ちあたり。案の如く戸をたゞく。「たそ、たそ。」と問ふ。「いや與三郎」と答ふ。不興通り手はなく、ながら門をあけてより、そこもと火を點し、若水を汲み、膳をすうれども、亭主顔のさま悪しくて、更にものいはず。中間不思議

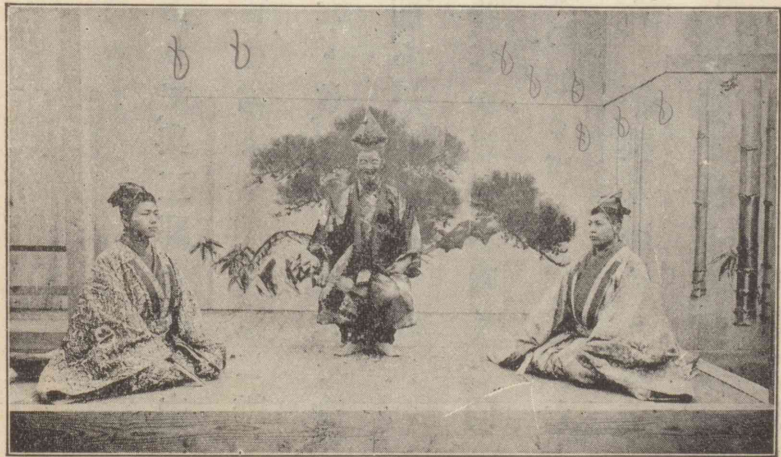
ふもつらち 大へん

福の神 (狂言)

男二人同伴して大晦日に出雲大社に参詣し、何とぞ富貴になし給はれと福の神を祈る。福の神顯れて、二人に富貴になるべき道を教へ、諷ふ。朝起をして慈悲あるべし、夫婦の中に腹立つべからず、人の來るをも厭ふまじ」と。

議に思ひつくづく思案し見れど宵に教へられし福の神をうち忘れ、やうやう酒を飲む頃に思ひ出して仰天し、膳をあげ、座敷を立ちざまに、「さらば福の神でござる。お暇申し参らする。」といひたり。

大名のもとに客あり。ふるまひに湯漬出でたり。その席へまた客あり。それにも膳を据ゑたり。また客來あり。膳を出せとあれどもつひに出しかぬる時、物まかなふも



醒睡笑 八卷。徳川時代初期の笑話集。

のを喚出し、「何とて手間もいらぬことの遅きや。湯を得わかさぬか。」としからる。時、手を束ねて、「湯はござるが、づけがござない。」と申したるにぞ、どつと笑になりける。思ふどち四五人いざなひて清水へまうでしが、茶屋に腰かけながらひたもの餅を喰ふ。をりからひとり俄にいひ出しけるは、「やれく、頬がすくみ、口のあかれぬやまひが出たは。」とてかうべをさげ、難儀なるさまなりしかば、人みな肝をけし、「こはいかなる事ぞと、うかがひ見けるに、編笠をきながら餅をくはんとせし故なり。編笠の緒を解き、頬をさすりて、<sup>いかにかがあるや。</sup>」と問ふに、彼の男しばらく思案して「祕事はまつげぢや。」と

二三笑話

(醒睡笑)

島崎藤村  
名は春樹、明治  
五年長野縣筑摩  
郡神坂村に生  
る。詩人、小説  
家。

二三 文章雜話

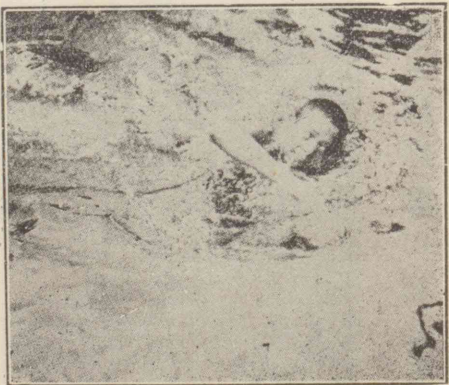
島崎藤村



十七八歳の頃、私は隅田川でよく泳いだことがある。全  
く水には経験のなかつた私  
も、漸く岸を離れることが出  
来るやうになり、次第に中流  
までも進み得るやうになつ  
て、一夏も水泳場に通ふ中に  
は、向ふの河岸まで泳ぎ越すことが出来た。

更にまた一夏も泳いで見たら、焦つて水ばかり飲んでゐ  
た頃には、よくもわからなかつた瀬の早い遅いもわかつて

來たし、淡水と潮水のまじり合つたあの川の中の冷たい處  
と、温かい處もわかつて來たし、水鳥のやうに浮きつ沈みつ  
する他の泳ぎ手の様子を泳ぎながら  
に見ることも出来た。板子なしには、  
溺れる外なかつた私も、二夏の末には、  
優に隅田川を横切つて往復した。私  
は普通の泳ぎ手が行ける處までは、自  
分も到達し得たやうに感じた。けれ  
どもそれ以上に進むことはなかく、容易でなかつた。私  
の身體は水に重かつたから、樂に浮身の出来る人を見たり、  
拔手の上手な人などを見た時は、全く感嘆して了つた。







これは文章の道にも當箝めて見ることが出来る。ただ  
 好い文章ばかり作らうと思つて焦心することは決して目  
 的を達する道でない。眞に好い文章を作らうと思へば、ど  
 うしてもまづ「自己」から正してかゝらねばならない。

同じ頃、私は家の裏にある畠へ出て、鋤を執つたことがあ  
 る。讀書の傍よく鋤を擔いで行つて、土を耕して見た。私  
 はまづ荒れた畠の地面を掘起すことから始めた。土を碎  
 いた。小石を擇分けた。地均しをした。汗を流してそれ  
 をやつた。葱の苗や馬鈴薯の芽のやうな植易いものから  
 作つて見た。その畠には、大根、白菜、茄子、豌豆、胡瓜などの類

をも植ゑて見た。草を取りに行き、さくを掛けて行つた。



菜が、私の食卓に上るやうになつた。それから、私は周圍に

馬鈴薯の花の盛りの頃に出  
 て試に土の中を探つて見る  
 と、はや丸い薯が幾つも、  
 その根元の方から出て來た、  
 豌豆の蔓が長く延びて人の  
 背よりも高くからみついた  
 畠の中には、嫩かい莢を摘む  
 鋤の音が聞えた。粗末なが  
 らも自分で作つた新鮮な野

耕  
 作

ある耕地を見て廻り、本當の百姓の手でよく整理された畠の間などを歩き廻る度に、耕作の苦心といふものが痛切に

自分の身に感じられるやうになつた。

私は或耕作を通じて非常に嚴肅な念に

打たれたことを、今でもよく思ひ出すこ

とが出来る。

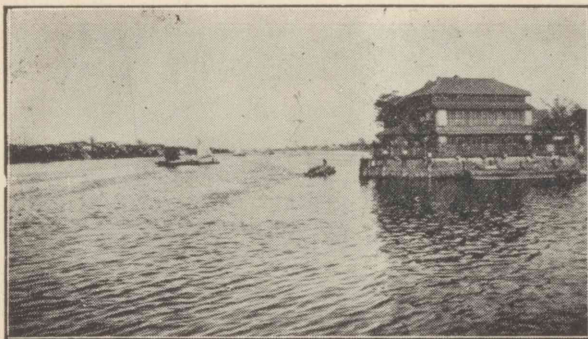
文章の手本とすべきものが何程我々

の周圍にあつても、それを悟らなければ

仕方がない。それを悟らうとするには、

どうしてもまづ自分で試みなければな

らない。「試みるといふことは、「悟る」といふことの第一歩だ。



隅田川

淺草の新片町に住んでゐた頃、家が淺草橋や兩國橋に近いので、私はあの隅田川の界限を漕廻つたことがある。最初の中は無暗と手足を動かし、あの長さ一丈ばかりもある櫓を前へ押し手許へ引きして、骨折つて見た。それでも舟は思ふやうに進まなかつた。が、次第々々に手足を動かすことが少くて、身體全體の力でゆつくりと櫓を押すことが出来るやうになつた。「向ふから大きな傳馬がやつて來たぞ。あれに一つ衝突しないやうに。」かう思つて漕いで行く楽しみなども、それから起つて來た。それから船頭のするところを見ると實にゆつくりしたものだ。そこには「力

の省略シヨウリョクがあり簡素カンソの美ミがある。

文章の道にも無暗と筆を弄弄することが決して自己の眞マコトの「表白ハクビ」とはならない。眞マコトに好ヨクい文章には眞マコトに好ヨクい「結晶ケツセイ」の力がある。

飯倉イハクラだより

「初學者のため  
に」二一七頁  
二二一頁。大正  
十一年九月、ア  
ルス發行。

# 女子國文大綱 卷四 終

## 常用漢字及略字

(一) 常用漢字 (千九百六十二字)

【一】一丁七丈三上下不  
世丙並【一】中【、】凡主  
【ノ】久乏乘【乙】乙九乞  
也乳亂【一】了事【二】二  
云互五井【一】亡交京亭  
【人】人仁仇今介仕他付  
仙代合以仰仲伴任企伊  
伏伐休伯伴伺似但位低  
住佐何余佛作使來例侍  
供依侮侯侵便係促後俗  
保俠信修俳俵俸併倉個  
倍倒候借倫假偉偏停健  
側偶傍傑備催働傳債傷  
傾僮僚僚僞僞債儀儼儼  
儒債優【儿】元兄充兆兕  
先光兌免兒兔【入】入内  
全兩【八】八公六共兵具

典兼【口】册再【一】冠  
【シ】冬冷涼准凌凍凝  
【凡】凡【一】凶凸凹出  
【刀】刀刃分切刈刊刑列  
初判判利到制制刷券刺刻  
則削前剛副割制劍劍劑  
【力】力功加劣助努効勅  
勇勉勳勸務務勝勞募勢勳  
勳勳勸【勺】勺夕包【ヒ】  
化北【一】匹區【十】十千  
升午半卑卓卓協南博  
【卜】占【口】印危却卯卷  
即卿【一】厄厘厚原【ム】  
去參【又】及友反叔取受  
叛【口】口古句叫召可叱  
史右司各合吉同名后吏  
吐向君吞吟否含呈吸吹

告周味呼命和咽哀品員  
哲唐唱商問啓善喉喜喪  
單嗣嘉嘗器噴噉囁【口】  
囚四回因困固國圍圍圍  
圖團【土】土在地坂均  
坊坐坑坪垂型垣埋城域  
執培基掘堂墜堤堪報場  
塔塗塚塵境墓塚增墜墜  
壁壇壓壤【土】土壯壹壽  
【又】夏【夕】夕外多夜夢  
【大】大天太夫央失奇奉  
奏契奔奢與奪獎舊【女】  
女奴好如妃妊妙妨妹妻  
妾姑始姑姓委姦姪姪姻  
姿威娘媼媼婚媾媾媾嫁  
媼媼媼媼媼媼媼媼媼  
季孤孫學【一】宅宇守安

完宗官定宛宜客宜室宮  
宰害宴家容宿寄密富寒  
察寡寢實審寫寬實【寸】  
寸寺卦射將專尉尊尋對  
導【小】小少尙【尤】就  
【尺】尺尼尾尿局居屈屈  
屋展層履屬【山】山岡岩  
岬岳岸峙峯島峽崇崎崩  
嶮【川】川州巡巢【工】工  
左巧巨差【己】己【巾】巾  
布帆希帖帝帥師席帳帶  
常帽幅幕幣【干】干平年  
幸幹【么】幻幼幾【一】床  
序底店府度座庫庭庭庶康  
廉廓廟廢廢廳【延】延廷  
建廻【升】弄弊【弋】弋  
【弓】弓弔引弘弟弱張強

彈【彡】形影【彡】役  
彼往征待律後徐徑徒得  
從御復循微德徹【心】  
心必忍志忘忙忠快念  
忽怒思急怨怪怯恐  
恥恨恩恭息悅悔悟患悲  
悼情惑惜惠惡憤惱想愁  
愉意愚愛感慈態慕慘慢  
憤慨慮慰慶慾愛憐憚憲  
憶憾憤懣應懲懷懸戀  
【戈】成我 戒威戰戲戴  
【戶】戶戾房所【手】手才  
打托扱扶批承技抑投抗  
折抱抵押抽拂拍拒拓拔  
拘拙招拜括拳拾持指振  
捌捕捧拾掃授掌排掘掛  
探探控推揚接提提換握揭  
揮援損搖搜摘携摩撫擇  
擊操擔據擬擴攝【支】支  
【支】收改攻放政故效斂

教敏救敗敢散敬敵數數  
整【文】文【斗】斗料斜  
【斤】斤斤斬新斷【方】方  
施旋族旗【无】既【日】  
日且旨早旬旭昇昌明易  
昔星春昨是時晚晝普景  
晴晶智暇暖暗暑暮暴曆  
曇曜【日】曲更書曹會替  
最會【月】月有朋服朕朗  
望朝期【木】木未末本札  
朱机朽杉李材村杖束柿  
杯東松板枕林枚果枝枯  
架柄某染柔查柘柱柳栗  
校株根格栽桃案桐桑楠  
梅條梨梯械葉棋棒柵棟  
森棺植楠業極榮構概樂  
榼樓檣樞模樣樹橋機橫  
檄檜檢櫻欄權【欠】欠欲  
款欺歎歎歐歎【止】止正  
此步武歲歷歸【歹】歹死

殊殉殖殘【爻】段殺穀殿  
毀【母】母每毒【比】比  
【毛】毛毫【氏】氏民【气】  
氣【水】水水永汁求汗汚  
江池決汽沈沒沖沙河沸  
油治沼沿況泉泊法波泣  
泥注泰泳洋洗津洪洲活  
派流浦浪浮浴海浸消涉  
液淑淚淡淨淫深混清淺  
添減渡温測港渴游湖湧  
湯源準溝溢溶溺滅滋滑  
滯滴滿漁漂漆漏演漕漠  
漢漫漸潔潛湖澤激濁濃  
濕濟濇瀆灌灌灣【火】火  
灰災炊炎炭烈烏無焰然  
煉煎煮煙煤照煩熊熟熱  
燃燈燒營燭爆爐【爪】爪  
爭爲爵【父】父【片】片版  
牌牒【牙】牙【牛】牛牧物  
牲特犧【犬】犬犯狀狂狐

狩狹狼猛貓猶猿獄獨獲  
獵獸獻【玄】玄率【玉】玉  
王玩珍珠班現球理琴  
【瓜】瓜【瓦】瓦瓶【甘】甘  
甚【生】生產錫【用】用  
【田】田由甲申男町界畏  
畑畔畜畝略番畫異畱當  
疊【疋】疋疎疏疑【疒】疫  
疲疾病症痕痘痛痢療  
【八】登發【白】白百的皆  
皇【皮】皮【皿】皿盆益盛  
盜盟盡監盤【目】目盲直  
相省眉看真眼眺眼着睡  
督睦瞭【矢】矢知短【石】  
石砂砲破研硬硯碁碎碑  
確磁磨礎【示】示社祈祕  
祖祝神票祭禁禍福禦禮  
【禾】秀私秋科秒租稗秭  
移稅程稚種稱稻稼稿穀  
積穗穩【穴】穴究空穿突

窃室窗影【立】立章童端  
競【竹】竹竿笑笛笠符第  
筆等箭筒答策筒算管簞  
箱節筭築篤簡簿籍【米】  
米粉粒粘粗粟粹精糖糞  
【糸】系紀約紅紋納純紗  
紙級紛素紡索紫累細紳  
紹紺終組結絕絞給給統  
絲絹經綠維網網綴統綿  
緊緒線縮綠編緩緯練縛  
縣縫縮縱總績繁織繕繪  
繭線縱縶績績繁織繕繪  
罪置署罰罵罷羅【羊】羊  
美羣義【羽】羽翁翬習翼  
【老】老考者【而】耐【末】  
耕【耳】耳耽聖聘聞聯聲  
職聽【肉】肉肋肖肝股肥  
肩肯育肴肺胃背胎胞胸  
胸能脂脇脈脊脚脫腎腐  
腕腦腰腸腹腺膏膚膜膝

騰膽臆臆【臣】臣臥臨  
【自】自良【至】至致臺  
【白】白與勇與舉舊【舌】  
舌舍【舟】舞【舟】舟航般  
舵舶船艇艘艦【良】良  
【色】色【艸】芋芝花芽芳  
苑苗若苦英茂茶草荒荷  
莊莖菊茵菓菜華萩萬落  
葉著蕤葦蒙蒸蓄蓮蔓蔭  
薄薦薪藍藏蕪藤藥蘇  
【虎】虎虐處虛虜號【虫】  
蚊蛇蛙蜂蜜融蟲蠹蠻  
【血】血衆【行】行術街衝  
衝衛【衣】衣表衰袂袋袖  
被袴裁裂裏裕補裝褸製  
複褻【西】西要覆【見】見  
規視親覺覽觀【角】角解  
觸【言】言訂計討訓託託  
詠詣訪許訴診許詔評詞  
詠詣試詩詰話詳誅誇詠

認誓誕誘語誠誤誦說課  
誼調談諒諒論諫論諸諾  
謀謂謂謙謙謝謔謹證讓  
譜警譯議護譽讀變讓  
【谷】谷【豆】豆豐【豕】豚  
象豪豫【貝】貝貞負財貢  
貧貨販賈賈貯貳貴賈貨  
費賈賈賈賈賈賈賈賈賈  
賞賈賈賈賈賈賈賈賈賈  
【赤】赤赦【走】走赴起超  
越趣【足】足距跡路跡踏  
蹟蹶躍【身】身【車】車軌  
軍軒軟軸較載輔輕輝輦  
輪輸輿轉【辛】辛辨辭辯  
【辰】辰農【疋】疋迂迎近  
返迫迭迷迷追退途迷逆  
透逐途通速造逢連週進  
逸途遇運運過道達達遙  
遞遠遭適遲遲遷遷還還  
還邊【邑】那那邪邛邛

郡部郵都鄉【酉】酌配酒  
酢酬醕醕醕醕醕【采】釋  
【里】里重野量【金】金釜  
釘針鈞鈞鈞鈞鈞鈞鈞鈞  
銘銳鋒銅錄錢錦鍋銀鑲  
鎖鑰鏡鑄鐘鐵鑑鑲【長】  
長【門】門閉開閤閤開閤  
閤關【阜】防附降限陸院  
陣除階階陸陸陶陶陶陶  
隅隆隊階階階階階階階  
險隱【隹】隹雀雄雅集屣  
雌雙雞離雞【雨】雨雪雲  
零雷電雷霜霜霧露靈  
【青】青靜【非】非【面】面  
【革】革靴鞍【音】音響  
【頁】頁頃項順頤頤頤頤  
頤頤頤頤頤頤頤頤頤頤  
頤頤頤頤頤頤頤頤頤頤  
頤頤頤頤頤頤頤頤頤頤  
【食】食飢飲飯飾養餓餘  
餅館饅【首】首【香】香

【馬】馬馳駁駈駐騎騰  
 驅驕駭騾【骨】骨體體  
 【高】高【影】髮【門】關

【鬼】鬼魂魔【魚】魚鮮鯉  
 鯛鯉【鳥】鳥鳩鳴鶴鷄  
 【鹵】鹽【鹿】鹿麗【麥】麥

【麻】麻【黃】黃【黑】黑默  
 點黨【鼓】鼓【鼠】鼠【鼻】  
 鼻【齊】齊齋【齒】齒齡

【龍】龍【龜】龜

注意

(一) 本表にない漢字は假名で書くこと (二) 固有名詞には本表にない文字を用ひても差支ない、ただし  
 外國(支那を除く)の人名地名は假名書すること (三) 代名詞、副詞、接續詞、感動詞、助動詞および  
 び助詞はなるべく假名で書くこと (四) 外來語は假名で書くこと

(二) 常用略字 (百五十四字、下の小字は字與體)

勸勤 權權 灌灌 欲欲 觀觀  
 沢澤 扶擇 訳訳 駅驛 積釋  
 變變 恋戀 蛮蠻 灣灣 莖莖  
 徑徑 經經 輕輕 併併 屏屏  
 瓶瓶 餅餅 研研 齊齊 齋齋  
 濟濟 劑劑 殘殘 淺淺 賤賤  
 錢錢 勞勞 營營 榮榮 學學  
 覺覺 拳拳 峯峯 斷斷 繼繼  
 齒齒 齡齡 濕濕 頭頭 窓窓  
 總總 屬屬 囁囁 為為 偽偽

帶帶 滯滯 參參 慘慘 兩兩  
 滿滿 癸癸 廢廢 崩崩 獵獵  
 亂亂 辟辟 潛潛 贊贊 走走  
 徒徒 從從 縱縱 惱惱 腦腦  
 処処 拋拋 担担 胆胆 未未  
 麥麥 壽壽 鑄鑄 數數 樓樓  
 樂樂 葉葉 誦誦 統統 竜竜  
 滝滝 隨隨 髓髓 廉廉 厭厭  
 聽聽 應應 虛虛 戲戲 遲遲  
 解解 獨獨 觸觸 疊疊 撰撰

虫虫 蚤蚤 仮仮 兎兎 兒兒 刺刺  
 勵勵 嘗嘗 國國 閉閉 圓圓  
 囃囃 壹壹 實實 寫寫 寶寶  
 扣扣 捺捺 糸糸 條條 歸歸  
 氣氣 炉炉 燄燄 犧犧 獻獻 畫畫  
 尚尚 盡盡 禮禮 稱稱 糸糸  
 欠欠 聲聲 台台 舊舊 万万  
 号号 証証 豐豐 弁弁 通通  
 辺邊 醫醫 鐵鐵 関関 雙雙  
 靈靈 余余 館館 體體 闘闘

搯鹽 點點 黨黨 龜龜

文語口語活用表

平水台 編

女子用文七冊付録

推	推	推	推	推	打	打	打	打	打	打	指	指	指	指	希	希	比	比	比	比	比	比
量	量	量	量	量	消	消	消	消	消	消	詠	詠	詠	詠	望	望	況	況	況	況	況	況
					さ	す	す	す	す	す	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
					ざ	ず	ず	ず	ず	ざ	なり	なり	なり	なり	たく	たく	こ	こ	こ	こ	こ	こ
</																						

文語口語活用表

平林治徳編

女子國文大綱附録

文語動詞活用表

口語動詞活用表

Table of Japanese verb conjugations for formal language (文語). Columns include verb types (e.g., 四段, 変, 起), forms (未然, 連用, 終止, etc.), and examples (e.g., 咲かす, 降らす, 死なす).

文語形容詞活用表

Table of Japanese adjective conjugations for formal language (文語). Columns include verb types (e.g., 四段, 変), forms (未然, 連用, etc.), and examples (e.g., 高く, 美しく).

文語助動詞活用表

口語助動詞活用表

Table of Japanese auxiliary verb conjugations for formal language (文語).

Table of Japanese auxiliary verb conjugations for colloquial language (口語).

Main table of Japanese verb conjugations for formal language (文語), including categories like 推量, 打, 指定, 希, 比.

Main table of Japanese verb conjugations for colloquial language (口語), including categories like 推量, 打, 指定, 希, 比.





昭和五年九月八日  
**文部省檢定**  
 高等女學校國語科用

昭和四年十月五日 印刷  
 昭和四年八月十五日 發行  
 昭和五年八月二十日 修正發行



發行所

編者

平林治徳

發行者

立川熊次郎

印刷者

北隅茂

立川書店

大阪市南區安堂寺橋通三丁目四十五番地  
 掘替七座(大阪一四六一番)

小店發行の教科書は常に多數の製本準備してありますから萬一各地賣捌所に賣切の場合課業に御差支の節は直接御注文下さい直ぐ御送り致します

女子	定價
國文	各金六十九錢
大綱	
卷一—卷十	



牙二學年五班

下細政子



凶

